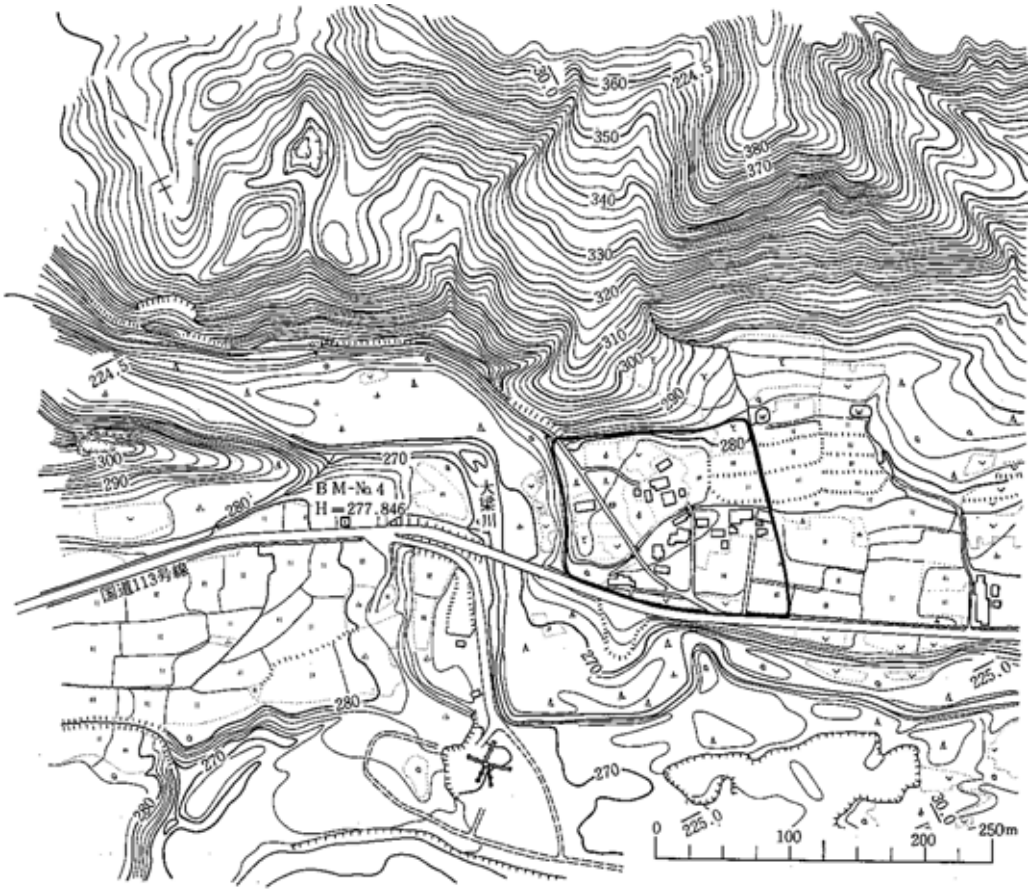
# (2) 原（はら）　頭（がしら）　遺 跡

# 調　査　要　項

遺跡記号：ＪＭ（宮城県遺跡地名表登載番号　04076）
遺跡所在地：宮城県刈田郡七ケ宿町字原頭
調査期間：昭和 58 年 9 月 2 日～昭和 58 年 10 月 24 日
調査主体者：宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局七ケ宿ダム工事事務所
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
　　調査員：真山　悟、小徳　晶、笠原　信男、村田　晃一
調査対象面積：約 10,000 ㎡
発掘面積　　：約 10,000 ㎡




第1図　周辺の地形

## Ⅰ．遺跡の立地（第1図）

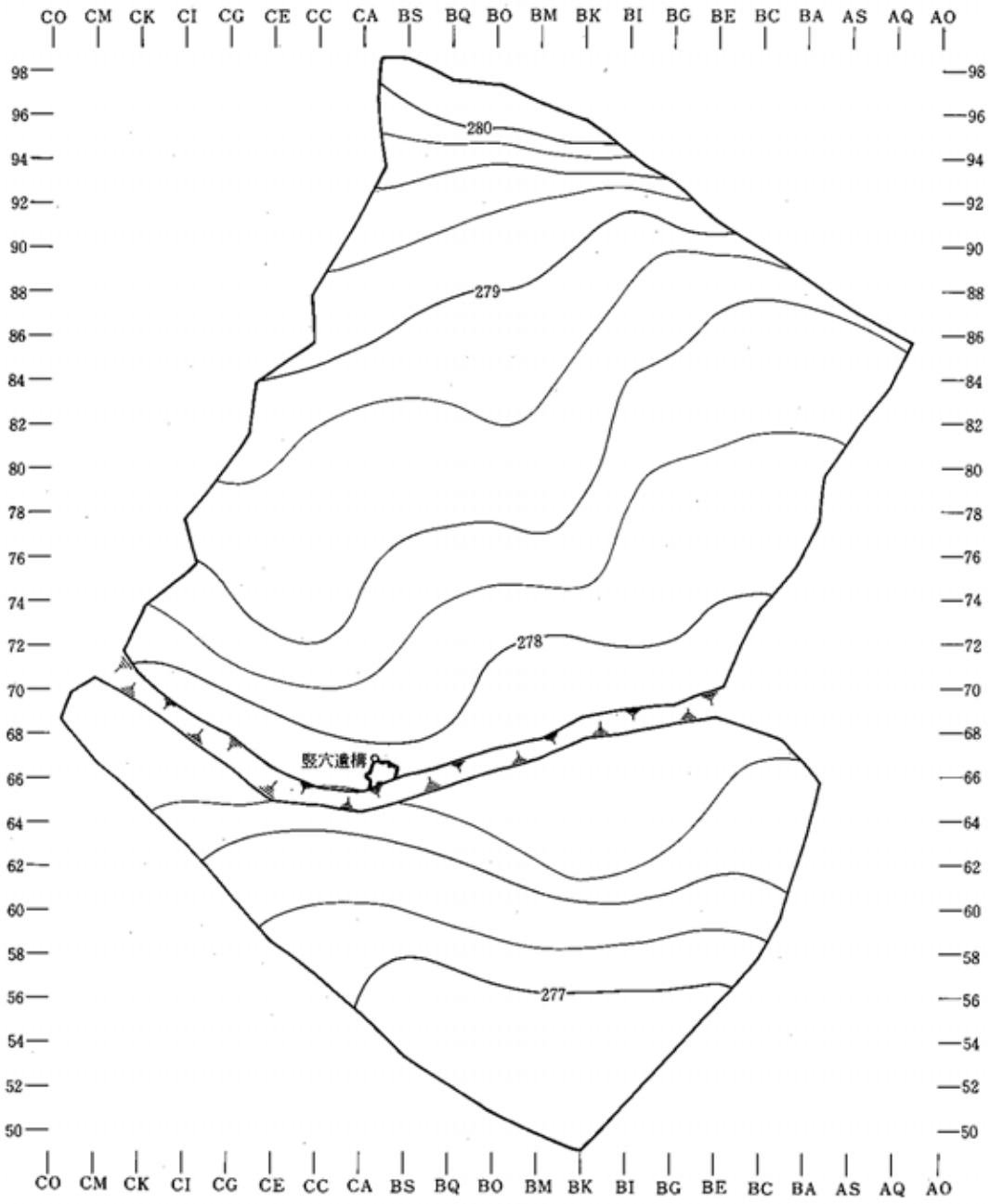
原頭遺跡は刈田郡七ケ宿町字原頭に所在する。遺跡は七ケ宿町を西から東へと流れる白石川北岸の河岸段丘上に立地しており、その範囲は南側と西側が白石川の支流である大梁川・北側が急峻な崖、東側が沢とにはさまれた部分と考えられ、総面積は約10,000㎡ほどになる。遺跡内は南東方向に緩やかに傾斜し、遺跡のほぼ中央部とその西に南北方向の尾根が走り、その間が小さな沢状の地形となっている。

なお、遺跡周辺の歴史的環境については「小梁川遺跡」を参照されたい。

## Ⅱ．調査の方法と経過（第2図）

発掘調査は七ケ宿ダムの建設によって完全に水没してしまう遺跡の記録保存を目的として行なわれた。調査は北辺一約82m、西辺一約100m、南辺一約92m、東辺一約111mの方形を呈する遺跡全面の表土を剥ぎ遺構確認を行なった。発掘面積は約1万㎡である。調査期間は昭和58年9月2日～10月24日である。

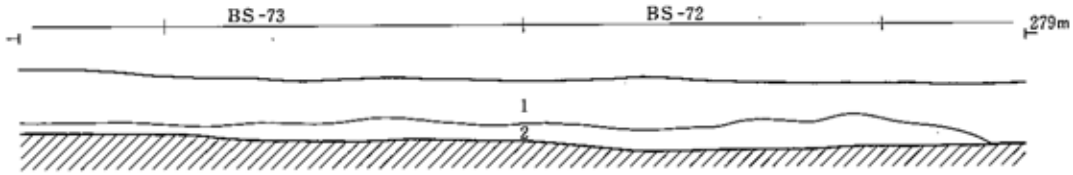
調査区の設定は七ケ宿ダム関連遺跡全体を国家座標に準拠した一辺が300mの大グリッドで区




第2図　グリッド・遺構配置図

画し、さらにそれぞれの大グリッド内を一辺が 3mの小グリッドで細分している。これらは大グリッドが東西方向をアルファベット、南北方向をローマ数字、小グリッドが東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字であらわされ、名称は大小ともその組み合わせで呼んだ。

発掘は基本層位をみるため調査区を北西から南東へ縦断する道路沿いに土層観察用のベルト




| NO | 土　色 | 土性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 黒褐色（10ＹＲ3/2） | シルト | 表　土 |
| 2 | 褐　色（10ＹＲ4/4） | シルト | 遺物を多く含む |

第３図　基本層位

を設け、表土を重機で除去し、その後ケズリをかけて遺構確認を行なった。遺構以外からの出土遺物はグリッド名と層位名を記入して取り上げ、遺構についてはプラン確認後ベルトを残して精査し、断面図を作成した。出土遺物は層位毎に取り上げ、完掘後は平面図を作成し、レベルを記入した後ダメ押しも行なっている。また、写真撮影は発掘の諸段階に応じて行ない、発掘調査の終了時には調査区全体の微地形を把握するため遺構の分布にあわせて 3mもしくは 6m毎にレベルを計った。

## III. 調査の成果

### 1、基本層位（第３図）

遺跡の基本層位は大きく分けて２層にわかれる。第１層が表土、第２層が褐色（10ＹＲ4/4）のシルトで、その下は黄褐色(10ＹＲ6/6)砂質シルトの地山である。地山には段丘礫が多く認められる。第２層は遺跡中央部の尾根から西側に認められ、西へいくほどその厚さが増している。遺物は第２層の堆積している遺跡西側より多く出土している。第２層から出土した土器をみると異なる時期のものが混在し、何れも破片で器面が磨滅しているものが多い。このことから第２層は再堆積層と考えられる。

### 2、発見された遺構と遺物

#### (1)　竪穴遺構とその出土遺物（第４図、第５図）

＜遺構の確認＞

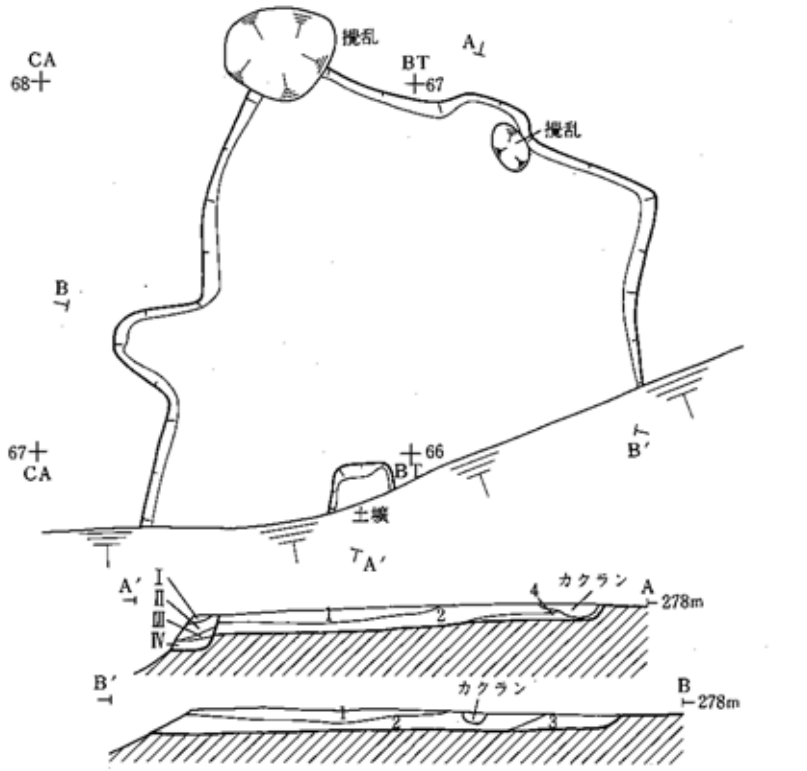
遺跡中央部より南西側のＢＳ～ＢＴ－65～67 区で確認された。確認面は第２層上面である。

＜平面形・残存状況・重複＞

遺構の南側は後世の土壙と溝とに切られ、北西コーナーと北壁中央部は攪乱を受けている。平面形は残存する北壁と東壁の一部から推定して方形を呈すると思われる。西壁には0.6×0.8mの張り出し部がある。北壁の長さは3.4m、東壁及び西壁の残存長はそれぞれ1.6m、4mである。

＜堆積土＞

４層認められた。第１層は遺構中央部に皿状に、第２層は遺構のほぼ全域に堆積している。第３層は西側の張り出し部に、第４層は北壁の壁際にと部分的に認められる。



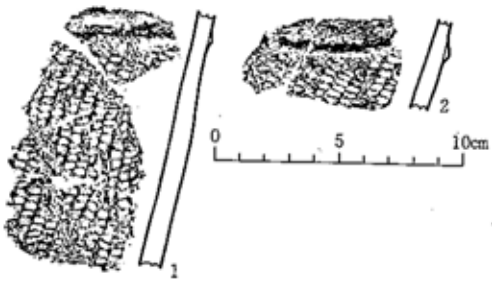

第4図　竪穴遺構・土壙

竪穴遺構

| NO | 土　色 | 土 性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 褐　色 (10 Y R 4/4) | シルト | 遺物を含む |
| 2 | 暗褐色 (10 Y R 3/4) | シルト | 炭化物を若干含む |
| 3 | 褐　色 (10 Y R 4/6) | シルト | 礫を多く含む |
| 4 | 暗褐色 (10 Y R 3/3) | シルト | 黄褐色シルトを斑状に含む |

土 壙

| NO | 土　色 | 土 性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| I | 黄 褐 色 (10 Y R 5/6) | シルト | |
| II | 褐　色 (10 Y R 4/4) | シルト | |
| III | 暗 褐 色 (10 Y R 3/3) | シルト | |
| IV | 明黄褐色 (10 Y R 6/6) | シルト | しまりなし |




第5図　竪穴遺構出土土器

＜壁＞

基本層位第２層を壁としている。残存する壁高は最も保存の良い所で 24㎝ である。壁の立ち上りは緩やかである。

＜床面＞

地山を床面とし、ほぼ平坦であるが、固くしまっていない。

＜出土遺物＞（第５図）

堆積土の第１層と第２層から縄文土器が若干出土している。小破片で磨滅したものが多く、図示できたのは同一個体と思われる２点だけである。

器形は深鉢で、胴部には斜行縄文(ＲＬ)が施され、その上端に横走する隆線がある。時期は縄文時代中期末～後期初頭頃と思われる。

＜まとめ＞

竪穴遺構は床面に伴う遺物がないため、その時期を特定できない。また、この遺構の性格も不明である。

**(2)　遺構以外の出土遺物**

基本層位第１層、第２層より出土した遺物は縄文土器 815 点、石器及び剥片・石核が 401 点である。

基本層位第２層から出土した土器を検討すると、異なる時期の土器が混在して出土している。しかも何れも破片であり、土器の表面が磨滅したものが多かった。このことから第２層は再堆積層と考えられる。したがって、説明にあたっては基本層位第１層、第２層出土遺物を一括して述べることとする。

**a、縄文土器**（第６図～第 12 図）

縄文土器は最も出土量が多い。しかし、完形品はなく接合資料も少なかった。このため、多くの破片の中から口縁部資料、底部資料及び特徴的な文様等をもつ胴部資料について、1.胎土 2.器面調整　3.器形　4.文様などの点から観察を行なった。

この結果、原頭遺跡出土縄文土器は以下の様に分けられた。

〇第Ⅰ群土器ー外面に貝殻腹縁文、半截竹管による沈線文、刺突文が施されるもの（第６図）。
〇第Ⅱ群土器ー胎土に植物繊維を含むものを一括した。最も出土量が多い（第７図～第 11 図）。
〇第Ⅲ群土器ー外面に粘土紐の貼付けによる文様のあるもの（第 12 図 1～4）。
〇第Ⅳ群土器ー外面に半截竹管による文様をもつもの（第 12 図 5～12）。
〇その他の土器ー上記以外の特徴をもつ土器を一括した（第 12 図 13～19）。

各群毎に図示資料の説明を加える。

**第Ⅰ群土器**（第６図）

すべて小破片となっており、全体の器形を窺いえるものはなく、何れの器壁も薄い。以下、器面に施された文様の種類毎に述べていく。

＜貝殻腹縁文と沈線文が施される土器＞（第６図 1、5～7）

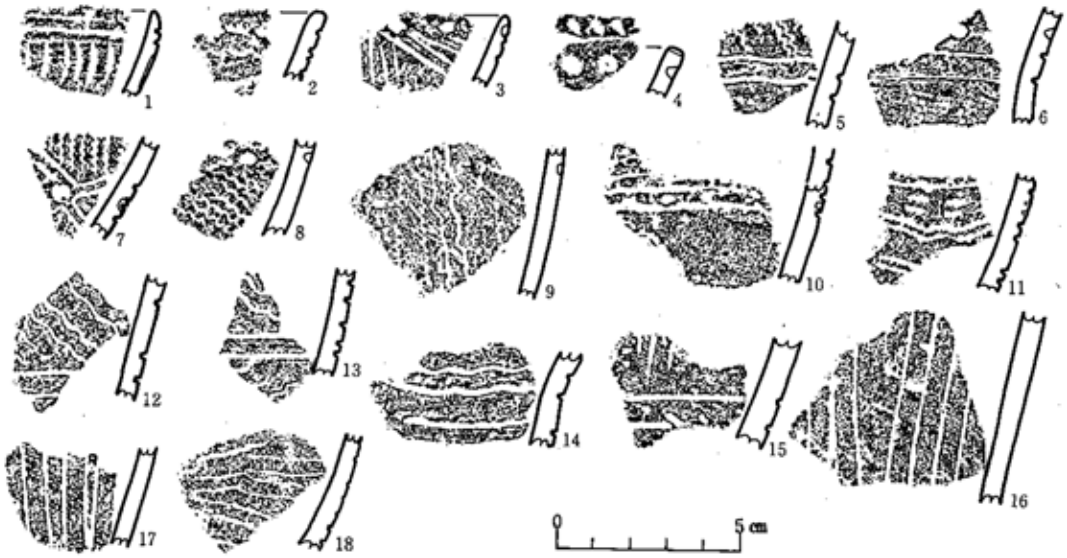
1 は口縁部資料で、内弯気味に外傾する口縁部に半截竹管による沈線で上下を区画された部分に縦位の貝殻腹縁文が施されている。5～7 は胴部資料で、6 と 7 には円形の刺突文も施されている。

＜貝殻腹縁文と円形刺突文が施される土器＞（第６図 8、9）

8 と 9 は胴部資料である。8 は円形の刺突文が横位に施されている。

＜沈線文と刺突文が施される土器＞（第６図 3、10、11）

3 は口縁部資料である。内弯気味に外傾する口縁上部に円形刺突文があり、その下に斜方向




| NO | 地区・層位 | 部位 | 縁部 | 口縁部 | 外面 | 内面 | その他 | 所属土器群 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | CD−60−2層 | 口縁部 | なし | 若干内湾 | 半截竹管による沈線文，貝殻腹縁文 | 不明 | | 第Ⅰ群土器 | 5−3 |
| 2 | CT−73−2層 | 口縁部 | なし | 外傾 | 貝殻腹縁文 | 不明 | | 第Ⅰ群土器 | 5−4 |
| 3 | BS−76−2層 | 口縁部 | なし | 外傾 | 半截竹管による沈線文，円形刺突文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−5 |
| 4 | BT−60−2層 | 口縁部 | なし | 外傾 | 円形刺突文 | ナデ | 口縁上端に刻目文 | 第Ⅰ群土器 | 5−6 |
| 5 | CD−73−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文，貝殻腹縁文，円形刺突文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−7 |
| 6 | CC−73−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文，貝殻腹縁文，円形刺突文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−8 |
| 7 | BT−75−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文，貝殻腹縁文，円形刺突文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−9 |
| 8 | CD−73−2層 | 胴部 | なし | | 貝殻腹縁文，円形刺突文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−10 |
| 9 | CD−72−1層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文，刺突文（沈線間） | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−11 |
| 10 | CF−69−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文，刺突文（沈線間） | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−12 |
| 11 | CF−60−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文，刺突文（沈線間） | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−13 |
| 12 | CD−72−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−14 |
| 13 | BT−76−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−15 |
| 14 | CA−75−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−16 |
| 15 | CJ−70−2層 | 胴部 | なし | | 沈線文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−17 |
| 16 | CF−69−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−18 |
| 17 | CH−71−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−19 |
| 18 | CC−62−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文 | ナデ | | 第Ⅰ群土器 | 5−20 |

第6図　縄文土器(1)

の沈線文が施されている。10、11 は胴部資料で、10 は平行沈線間に、11 は山形の平行沈線間に刺突文が施されている。

＜貝殻腹縁文が施される土器＞（第 6 図 2）

2 のみである。口縁部に横方向と斜方向の貝殻腹縁文が施されている。

＜円形刺突文が施される土器＞（第 6 図 4）

4 のみである。口縁上部に円形の刺突文が横位に施されている。口唇部には刻目が入る。

＜沈線文が施される土器＞（第 6 図 12〜18）

全て胴部資料で、沈線で表現された文様には直線状(12〜17)、波状(12〜14)、鋸歯状(13)、入組状(18)のものがあり、これらが組み合わされたものもある(12〜14)。

以上のような特徴を持つ土器は、宮城県高清水町大寺遺跡、福島県塩川町常世遺跡などに類例があり、それぞれ縄文時代早期大寺式(興野：1970ｃ)、常世式(芳賀：1977)と呼称されている。しかし、現在のところ双方とも型式内容が不明確であるため、ここでは第Ⅰ群土器の年代が縄文時代早期中葉であるとの指摘にとどめておく。

**第Ⅱ群土器**（第７図～第11図）

胎土に植物繊維を含む土器群で、全て深鉢から成っている。原頭遺跡出土土器の７割を占めるが、接合資料は少なく、底部から口縁部にいたる個体はない。口縁部、胴部、底部に分けて観察を行なった結果、大きく文様をもつものと地文のみのものとに分けられた。地文は全ての土器に施されていたと思われ、底面にも認められる。その内容は０段多条の縄文がほとんどで、撚糸文は非常に少ない。縄文は非結束の羽状縄文が多く、次いで斜行縄文となり、結束の羽状縄文は稀である。原体の末端が縛られている例もある。以下大別に従って述べていく。

なお、地文の記載方法は結束の羽状縄文を「ＲＬ×ＬＲ」、非結束の羽状縄文を「ＲＬ・ＬＲ」と表現し、小破片のため羽状縄文か斜行縄文か区別できないものは単に「縄文」とする。

**○文様が施されるもの**（第７図～第９図）

文様の種類には撚糸圧痕文、隆線文、粘土紐貼付文、沈線文、短沈線文、刻目文があり、これらは単独で施される例は少なく、それぞれ組み合わされて菱形や三角形などの文様が描かれる場合が多い。文様帯は口縁部から胴部まで形成されるものと口縁部にのみ形成されるものとがある。内面の調整はミガキが多く、ナデや擦痕は少ない。

**ー口縁部ー**（第７図～第８図40）

口縁部の形態には波状縁（1～18）と平縁（19～40）とがある。

**波状縁のもの**（1～18）

頸部が屈曲して口縁部は内弯もしくは内傾している。屈曲部に隆線文が巡るものが多く、隆線上にはヘラ状工具による短沈線文や刻目文が施されている。口縁端部は全て平坦である。施された文様の種類から２つに分かれる。

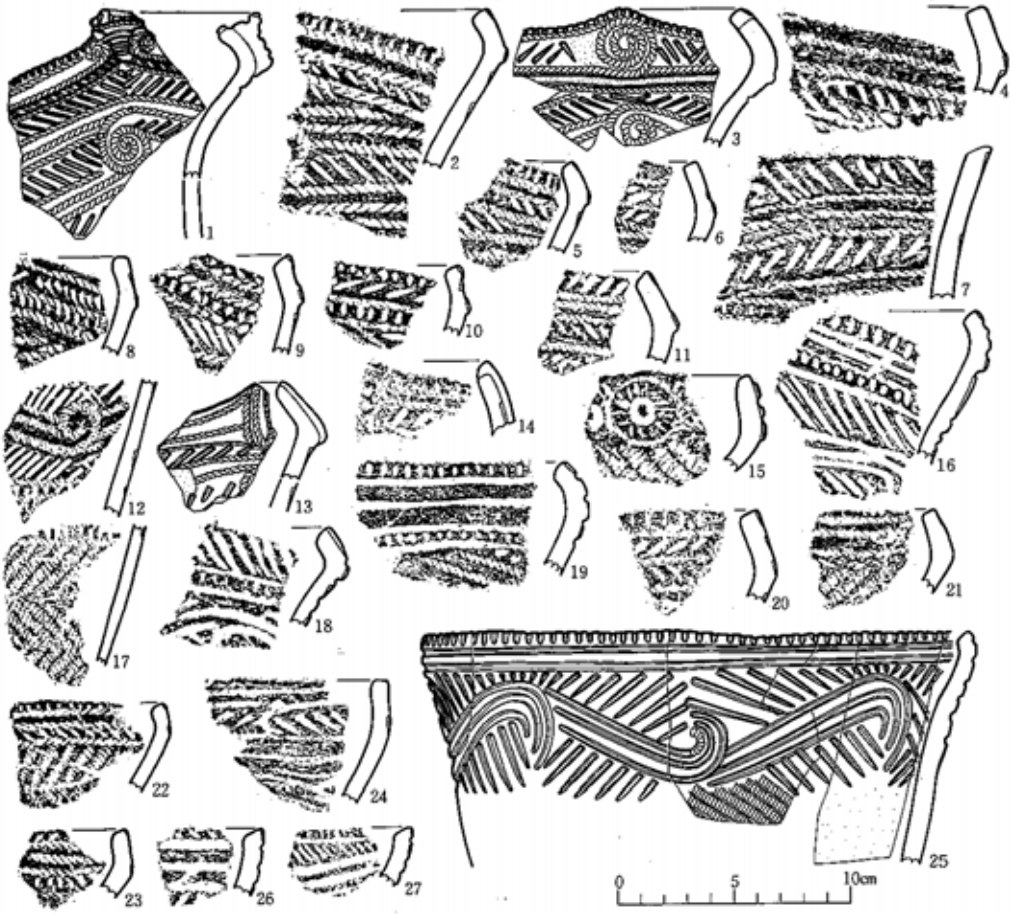
＜撚糸圧痕と短い沈線、刻目で文様が描かれるもの＞（1～15、17）

1～3 は同一個体である。波頂部の形態には大波状で突起のつくもの(1)と小波状のもの(3)の２つがある。3 と同じ破片はもう１個確認されているが、大波状部と小波状部の組み合わせが2―2、1―3、1―2 のいずれであるのかは不明である。突起端部に渦巻状の撚糸圧痕文（Ｌ）が

(大)　(小)　(大)　(小)　(大)　(小)

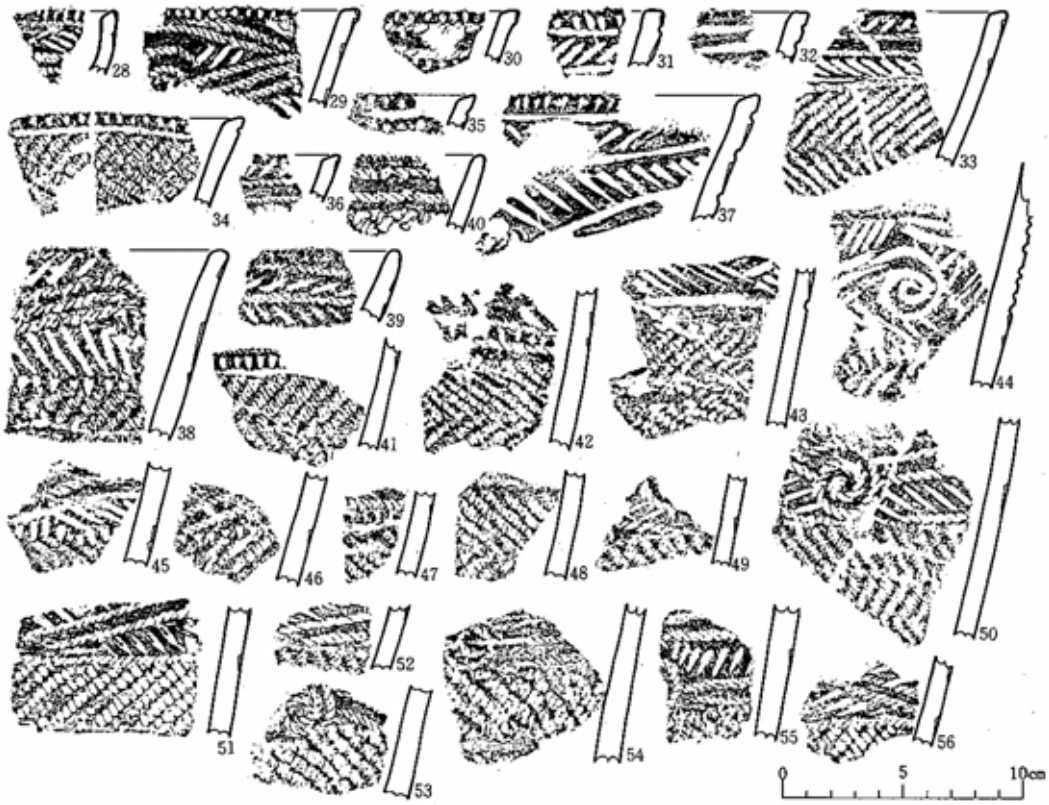
あり、屈曲部へ向けて縦位の粘土紐貼付文が施されている。4 と 7 も同一個体で、隆線上は短い沈線が二段施されている。8・12・17 も同一個体で、12・17 をみると地文（ＲＬ・ＬＲ）と文様との境に上下を撚糸圧痕文（Ｌ）にはさまれた刻目文が巡っている。13 と 14 は波頂から屈曲部へ向けて縦位の粘土紐貼付文が施され、13 は貼付上に撚糸圧痕文（Ｌ）が施されている。

これらの文様は、渦巻状の撚糸圧痕文を基点としてその間を 1～3 本の撚糸圧痕文で結び、菱形もしくは三角形の構成をとり、圧痕間を短い沈線で埋めている。口縁上端に刻目文が施されるものが多い。




| NO | 地区・層位 | 部位 | 繊維 | 口縁部形態 | 口縁端部 | 外面 | 内面 | その他 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | CH−70−2層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(R, L), 縦位貼付文, 隆線文, 短沈線文, 刺目文 | ミガキ | 同一個体 | 2−1 |
| 2 | CH−71−2層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(R, L), 隆線文, 短沈線文, 刺目文 | ミガキ | | 2−2 |
| 3 | CI−69−2層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(R, L), 隆線文, 短沈線文, 刺目文 | ミガキ | | 2−3 |
| 4 | CB−78−2層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 隆線文, 短沈線文(隆線上) | 不明 | 7と同一個体 | 2−4 |
| 5 | CG−71−2層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(R, L), 隆線文, 短沈線文, 刺目文 | ミガキ | | 2−5 |
| 6 | CH−69−2層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 隆線文, 短沈線文 | ミガキ | | 2−6 |
| 7 | CB−77−2層 | 胴部 | 含む | —— | —— | 撚糸圧痕文(L), 短沈線文 | 不明 | 4と同一個体 | 2−7 |
| 8 | CA−81−1層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 隆線文, 短沈線文, 刺目文(隆線上) | ミガキ | 12, 17と同一個体 | 2−8 |
| 9 | BT−82−1層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(R), 隆線文, 短沈線文, 刺目文 | ミガキ | | 2−9 |
| 10 | CA−82−1層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 隆線文, 短沈線文, 刺目文 | ミガキ | | 2−10 |
| 11 | CA−79−2層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 隆線文, 短沈線文 | ミガキ | | 2−11 |
| 12 | CA−81−1層 | 胴部 | 含む | —— | —— | 撚糸圧痕文(L), 短沈線文, 刺目文 | ミガキ | 8, 17と同一個体 | 2−12 |
| 13 | CC−78−2層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 粘土粗粒付文, 短沈線文 | 不明 | | 2−13 |
| 14 | CC−74−1層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 粘土粗粒付文, 短沈線文 | ミガキ | | 2−14 |
| 15 | CH−70−2層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(R,L), 粘土粗粒付文, 沈線文, 刺目文(貼付上) | ミガキ | | 2−15 |
| 16 | CE−78−1層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 隆線文, 沈線文, 短沈線文, 刺目文 | ミガキ | | 2−16 |
| 17 | CA−81−1層 | 胴部 | 含む | —— | —— | 撚糸圧痕文(L), 刺目文, 羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | 8, 12と同一個体 | 2−17 |
| 18 | CH−71−2層 | 口縁部 | 含む | 波状縁 | 平坦 | 隆線文, 沈線文, 短沈線文, 刺目文(隆線上) | 不明 | | 2−18 |
| 19 | CD−72−1層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 沈線文, 刺目文 | ミガキ | | 2−19 |
| 20 | CD−81−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 短沈線文, 刺目文 | ミガキ | | 2−20 |
| 21 | CH−70−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 縄文(LR) | ナデ | | |
| 22 | CG−71−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(R, L), 刺目文, 羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | | 2−21 |
| 23 | CH−71−1層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 刺目文 | 不明 | | |
| 24 | CD−76−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 撚糸圧痕文(L), 短沈線文 | 磨痕 | | 2−22 |
| 25 | CG−70−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 内削ぎ | 沈線文, 一部撚糸圧痕文(L), 短沈線文, 刺目文, 縄文(RL) | ミガキ | | 2−23,24,25 |
| 26 | CB−81−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 沈線文, 刺目文 | 不明 | | |
| 27 | CD−83−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 沈線文, 短沈線文, 刺目文 | ミガキ | | 2−27 |

第7図　縄文土器(2)




| NO | 地区・層位 | 部位 | 厚さ | 口縁部形態 | 口縁端部 | 外面 | 内面 | その他 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 28 | CB−82−1層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 内削ぎ | 燃糸圧痕文(L)、短沈線文、刻目文 | ミガキ | | |
| 29 | CB−78−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 燃糸圧痕文(L)、短沈線文、刻目文 | ミガキ | | 2−26 |
| 30 | CA−82−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 燃糸圧痕文(R)、刻目文 | ミガキ | | |
| 31 | CA−82−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 沈線文、短沈線文、刻目文 | ミガキ | | |
| 32 | CG−70−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 沈線文、短沈線文 | 不明 | | 2−28 |
| 33 | CB−81−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 平坦 | 燃糸圧痕文(L)、短沈線文、羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | | 2−32 |
| 34 | CD−81−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 内削ぎ | 沈線文、刻目文、羽状縄文(RL・LR) | ナデ | | 2−29 |
| 35 | CB−78−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 内削ぎ | 沈線文、刻目文 | ミガキ | | |
| 36 | CB−81−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 内削ぎ | 燃糸圧痕文(L)、刻目文 | ミガキ | | |
| 37 | CA−78−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 内削ぎ | 沈線文、短沈線文、刻目文 | ミガキ | 補修孔有 | 2−30 |
| 38 | CF−76−1層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 丸味をもつ | 燃糸圧痕文(R)、短沈線文、刻目文、羽状縄文(RL・LR) | 不明 | | 2−31 |
| 39 | CH−71−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 丸味をもつ | 燃糸圧痕文(L)、短沈線文 | 不明 | | |
| 40 | CG−76−2層 | 口縁部 | 含む | 平縁 | 丸味をもつ | 燃糸圧痕文(L)、縄文(RL) | ナデ | | |
| 41 | CB−84−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(L)、刻目文、羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | | 3−6 |
| 42 | CO−78−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(L)、短沈線文、刻目文、羽状縄文(RL・LR) | 不明 | | 3−5 |
| 43 | CA−82−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(R)、沈線文、短沈線文、羽状縄文(RL・LR) | ナデ | | 3−13 |
| 44 | CG−70−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 沈線文、短沈線文、縄文(LR) | 不明 | | 3−12 |
| 45 | CB−81−1層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(L)、短沈線文、刻目文、縄文(RL) | 不明 | | 3−16 |
| 46 | CP−72−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(L)、刻目文、縄文(LR) | 不明 | | 3−11 |
| 47 | CA−79−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(L)、刻目文、縄文(RL) | 不明 | | 3−8 |
| 48 | CE−81−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(L)、羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | | 3−10 |
| 49 | CE−71−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(R、L)、短沈線文、縄文(RL) | 不明 | | 3−14 |
| 50 | CE−75−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(L)、短沈線文、羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | | 3−4 |
| 51 | CE−75−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(R)、短沈線文、縄文(LR) | ミガキ | 原体末端自縛 | 3−7 |
| 52 | CC−75−1層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(L)、短沈線文、縄文(RL) | 不明 | | 3−15 |
| 53 | CD−74−1層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(L)、縄文(RL) | ナデ | | 3−3 |
| 54 | CD−76−1層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(L)、羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | | 3−2 |
| 55 | CD−75−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(L)、短沈線文、縄文(RL) | ミガキ | | 3−1 |
| 56 | CC−81−2層 | 胴部 | 含む | — | — | 燃糸圧痕文(R)、短沈線文、縄文(LR) | ミガキ | | 3−9 |

第8図　縄文土器(3)

15 は本遺跡で他に例をみない。小波頂下に円形の粘土紐貼付文があり、その内周にも撚糸圧痕文（L）が施されている。屈曲部以下は縄文（RL）が施されている。

＜沈線と刻目で文様が描かれるもの＞（16、18）

16 は口縁上端の刻目文と隆線文との間に平行沈線が 3 本走り、18 は口縁上端と隆線文との間に斜位の短い沈線が施されている。これらのモチーフは前述の撚糸圧痕文を用いたものと同じで、この場合沈線が撚糸圧痕の代わりに用いられている。

**平縁のもの**（19～40）

口頸部の形態から頸部が屈曲し、口縁部が内弯もしくは内傾するもの、口縁部が直立気味になるもの、口縁部が外傾するものの 3 つに分かれる。

＜頸部で屈曲し、口縁部が内弯もしくは内傾するもの＞（19～23）

口縁端部は全て平坦である。口縁部の文様は口縁に沿う撚糸圧痕文（20～23）が沈線文（19）、である。21 を除いて口縁上端には刻目が施されている。頸部以下にも文様が施されるもの（19・20・23）と頸部以下が地文となるもの（21・22）がある。地文は 21 が縄文(ＬＲ)で、22 が非結束の羽状縄文(ＲＬ・ＬＲ)である。

＜頸部が軽く屈曲し、口縁部が直立気味になるもの＞（24～28）

口縁端部は平坦なもの（24）と内側に削がれたもの（25～28）とがある。全て頸部以下まで文様が施されている。25～28 は口縁上端に刻目をもつ。撚糸圧痕で文様が描かれるもの(24・28)と沈線で文様が描かれるもの(25～27)がある。25 は沈線で上下逆向きの蕨状文が描かれ、その間に短い沈線が施されている。

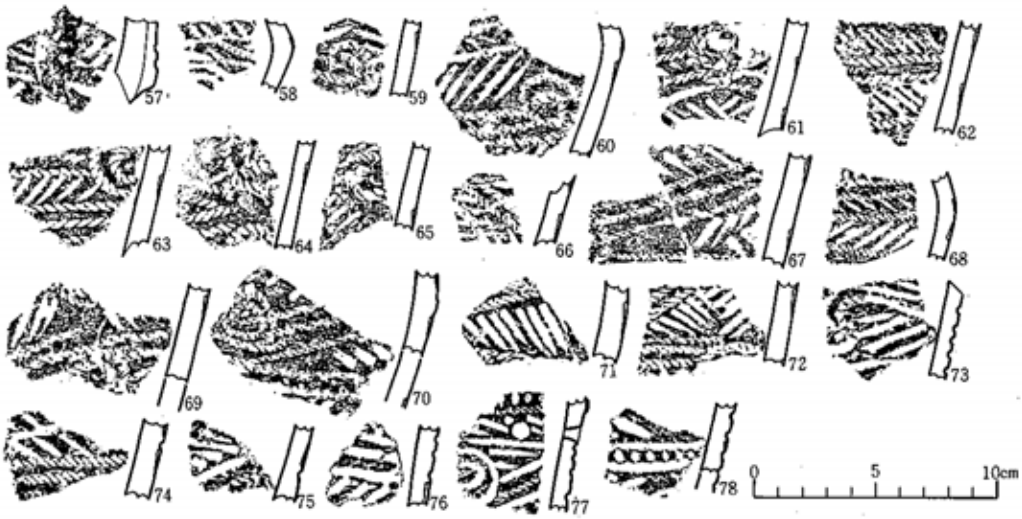
＜口縁部が外傾するもの＞（29～40）

口縁端部は平坦なもの(29～33)と内側に削がれたもの(34～37)、丸味をもつもの（38～40）がある。

文様は撚糸圧痕で描かれるもの（29・30・33・36・38～40）と沈線で描かれるもの（31・32・34・35・37）とがある。双方とも文様帯が広いタイプ（29・37・38）と狭いタイプ(33・34・40)がある。29 は渦巻状の文様が、38 は蕨状の文様が全体の文様の基点となっている。33 と 40 は口縁に沿って撚糸圧痕文が施され、33 はその間に斜位の短い沈線が配されている。37 は沈線と刻目、短い沈線で文様が描かれ、補修孔が二対認められる。34 は口縁端部の刻目文の下に沈線が 1 本巡り、その下は地文(ＲＬ・ＬＲ)が施されている。34 のほかに文様部と地文部との間に横位の文様が巡るものは 33（撚糸圧痕文）と 38（刻目文）がある。地文は 33・34・38 が非結束の羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）で、40 には縄文（ＲＬ）がみられる。

**ー胴部ー**（第 8 図 41～第 9 図）

41～56 は文様と地文の境がわかる資料である。そこには双方を区別するために横位の文様が巡

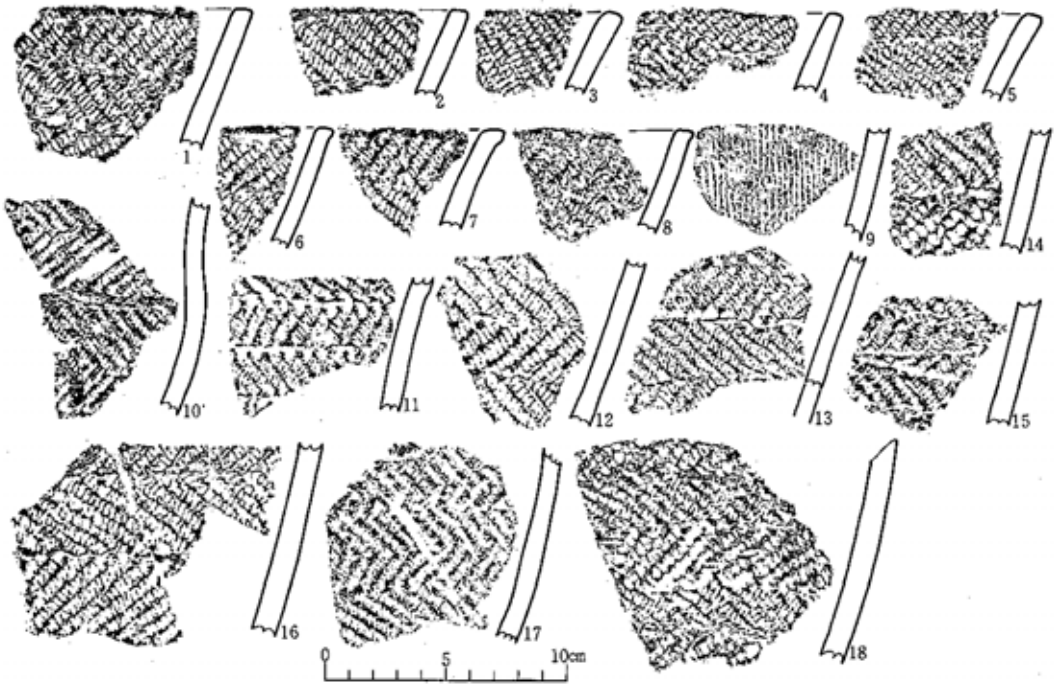



| NO | 地区・層位 | 部位 | 縄紋 | 口縁部形態 | 口縁端部 | 外面 | 内面 | その他 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 57 | CF−78−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 粘土紐貼付文、短沈線文、刻目文（貼付上） | ミガキ | | 3−29 |
| 58 | CF−70−1層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、刻目文 | 不明 | | 3−17 |
| 59 | BT−74−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、短沈線文 | ナデ | | 3−19 |
| 60 | CD−77−1層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、短沈線文 | 不明 | | 3−25 |
| 61 | CD−70−1層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(R)、短沈線文、刻目文 | 不明 | | 3−22 |
| 62 | CB−84−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(R、L)、短沈線文 | ミガキ | 同一個体 | 3−30 |
| 63 | CB−84−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(R、L)、短沈線文 | ミガキ | | 3−20 |
| 64 | 表土 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(R、L)、短沈線文 | ミガキ | | 3−24 |
| 65 | CD−77−1層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、短沈線文 | ミガキ | | 3−18 |
| 66 | CC−76−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(R、L)、短沈線文 | 磨滅 | | 4−4 |
| 67 | CG−71−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、短沈線文 | ミガキ | | 3−26 |
| 68 | CD−77−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、短沈線文、刻目文 | 不明 | | |
| 69 | CB−84−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、短沈線文 | ナデ | | 3−23 |
| 70 | CD−76−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、短沈線文 | ナデ | | 3−27 |
| 71 | CD−81−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、短沈線文 | ナデ | 同一個体 | 4−1 |
| 72 | CD−81−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、短沈線文 | ナデ | | 4−3 |
| 73 | CE−81−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 沈線文、一部撚糸圧痕文(L)、短沈線文 | 不明 | 縄文単位、沈線文→撚糸圧痕文 | 3−21 |
| 74 | CE−81−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、短沈線文 | ミガキ | | 4−2 |
| 75 | CH−71−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、短沈線文 | ミガキ | 補修孔有 | 4−5 |
| 76 | CD−82−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 沈線文、短沈線文 | ミガキ | | 4−6 |
| 77 | CD−80−2層 | 胴部 | 含む | − | − | 撚糸圧痕文(L)、沈線文、短沈線文、刻目文 | ミガキ | 補修孔有 | 3−28 |
| 78 | CD−73−1層 | 胴部 | 含む | − | − | 沈線文、短沈線文、刻目文 | 不明 | | 4−7 |

第９図　縄文土器(4)

るものが多い。41・42・47 には撚糸圧痕間に刻目を配した文様があり、44～46 には刻目文がみられる。43 には沈線文があり、49～56 は地文との境付近に渦巻状の撚糸圧痕を配し、その間を結ぶ撚糸圧痕で地文部と区別している。地文は 41～43・48・50・54 が非結束の羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）で、45・47・49・52・53・55 には縄文(ＲＬ)、44・45・51・56 には縄文(ＬＲ)がみられる。43・51 の原体の末端は縛られている。

57～78 は文様のみ認められる破片資料で、57 は頸部が屈曲し屈曲部より上に縦位の粘土紐貼付文が施されており、口縁端部に近い。59～72 は撚糸圧痕と短い沈線で文様が描かれ、このうち 60・61・63～65・69・70・72 に渦巻状の文様が施されている。73～75・77 は撚糸圧痕と沈線とによって文様が描かれ、73 は沈線による蕨状文の先端に撚糸圧痕文（Ｌ）が施されている。77 は沈線で渦巻状の文様が描かれ、補修孔も 1 個認められる。76 と 78 は沈線によって文様が施




| NO | 地区・層位 | 部位 | 繊維 | 口縁端部形態 | 外面 | 内面 | その他 | 所属土器群 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | CE−75−2層 | 口縁部 | 含む | 平坦 | 羽状縄文(RL・LR) | ナデ | | 第II群土器 | 4−10 |
| 2 | CE−75−2層 | 口縁部 | 含む | 平坦 | 縄文(RL) | ナデ | 原体末端合縛 | 第II群土器 | 4−9 |
| 3 | CG−71−2層 | 口縁部 | 含む | 平坦 | 縄文(RL) | ナデ | | 第II群土器 | 4−8 |
| 4 | CD−82−2層 | 口縁部 | 含む | 平坦 | 羽状縄文(RL・LR) | 不明 | | 第II群土器 | 4−12 |
| 5 | BT−82−1層 | 口縁部 | 含む | 平坦 | 羽状縄文(RL・LR) | ナデ | | 第II群土器 | 4−11 |
| 6 | CB−84−2層 | 口縁部 | 含む | 平坦 | 羽状縄文(RL・LR) | ナデ | 口縁上端がややはり出す | 第II群土器 | 4−14 |
| 7 | CD−76−2層 | 口縁部 | 含む | 平坦 | 羽状縄文(RL・LR) | ナデ | 口縁上端がややはり出す | 第II群土器 | 4−15 |
| 8 | CC−80−2層 | 口縁部 | 含む | 平坦 | 羽状縄文(RL・LR) | ナデ | 口縁上端がややはり出す | 第II群土器 | 4−16 |
| 9 | 表土 | 胴部 | 含む | — | 無節縄文(R) | ナデ | | 第II群土器 | 4−25 |
| 10 | CB−78−2層 | 胴部 | 含む | — | 羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | 体部膨らむ | 第II群土器 | 4−18 |
| 11 | CP−72−1層 | 胴部 | 含む | — | 羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | 外部に段あり | 第II群土器 | 4−24 |
| 12 | CA−72−2層 | 胴部 | 含む | — | 羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | | 第II群土器 | 4−22 |
| 13 | CC−72−1層 | 胴部 | 含む | — | 羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | | 第II群土器 | 4−19 |
| 14 | CE−76−2層 | 胴部 | 含む | — | 羽状縄文(RL・LR) | ミガキ | | 第II群土器 | 4−17 |
| 15 | CD−73−2層 | 胴部 | 含む | — | 羽状縄文(RL・LR) | ナデ | | 第II群土器 | 4−23 |
| 16 | CE−81−2層 | 胴部 | 含む | — | 羽状縄文(RL・LR) | ナデ | | 第II群土器 | 4−20 |
| 17 | CA−80−2層 | 胴部 | 含む | — | 羽状縄文(RL・LR) | 不明 | | 第II群土器 | |
| 18 | CB−78−2層 | 胴部 | 含む | — | 羽状縄文(RL・LR) | ナデ | 内面に炭化物付着 | 第II群土器 | 4−21 |

第10図　縄文土器(5)

されている。

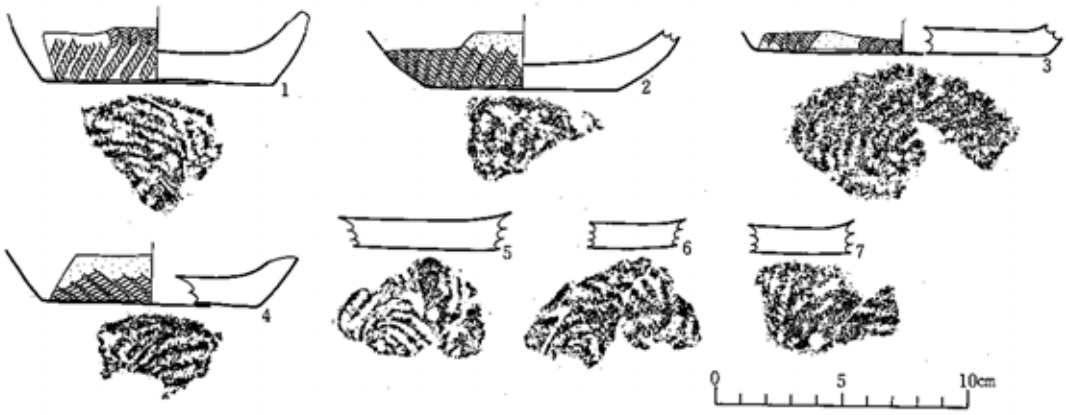
**○地文のみ施されるもの**（第10図）

いずれも口縁部が外傾し、口縁端部が平坦である。内面の調整はナデが多く、ミガキや擦痕は少ない。

**ー口縁部ー**（第10図1〜8）

6〜8の口縁上端はややはり出している。地文は1・4〜8が非結束の羽状縄文（RL・LR）で、2と3には縄文（RL）が認められる。2の原体の末端は縛られている。

**ー胴部ー**（第10図9〜18）




| NO | 地区・層位 | 部　位 | 繊　維 | 外　面 | 内　面 | 備　考 | 所属土器群 | 図　版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | CD−81−2層 | 胴部〜底部 | 含　む | 結束の羽状縄文（RL×LR）（胴部及び底面） | ナ　デ | | 第II群土器 | 4−27 |
| 2 | CD−76−2層 | 胴部〜底部 | 含　む | 縄文（LR）（胴部及び底面） | ナ　デ | | 第II群土器 | 4−28 |
| 3 | CI−70−2層 | 胴部〜底部 | 含　む | 縄文（LR），羽状縄文（RL・LR）（底面） | ナ　デ | | 第II群土器 | 4−29 |
| 4 | CG−76−2層 | 胴部〜底部 | 含　む | 縄文（RL），縄文（LR）（底面） | ナ　デ | | 第II群土器 | 4−26 |
| 5 | CE−74−2層 | 底　部 | 含　む | 羽状縄文（RL・LR）（底面） | ナ　デ | | 第II群土器 | 4−30 |
| 6 | CI−70−2層 | 底　部 | 含　む | 縄文（LR）（底面） | ナ　デ | | 第II群土器 | |
| 7 | CF−73−2層 | 底　部 | 含　む | 縄文（LR）（底面） | ナ　デ | | 第II群土器 | |

第11図　縄文土器(6)

10 は胴部がゆるやかに膨らみ、11 は外面に軽い段をもっている。地文は 9 が撚糸文(R)である他は全て非結束の羽状縄文（RL・LR）である。15 の原体の末端は縛られている。

**ー底部ー**（第 11 図）

底部資料は全部で 15 点あり、その内訳は平底 10 点、丸底風平底 5 点で、底面にはいずれも胴部と同じ原体による縄文が中心から放射状に施されている。19〜22 は平底で、地文は 1 が結束羽状縄文（RL×LR）で、他は縄文（4−RL、2・3−LR）がみられる。23〜25 は丸底風平底である。

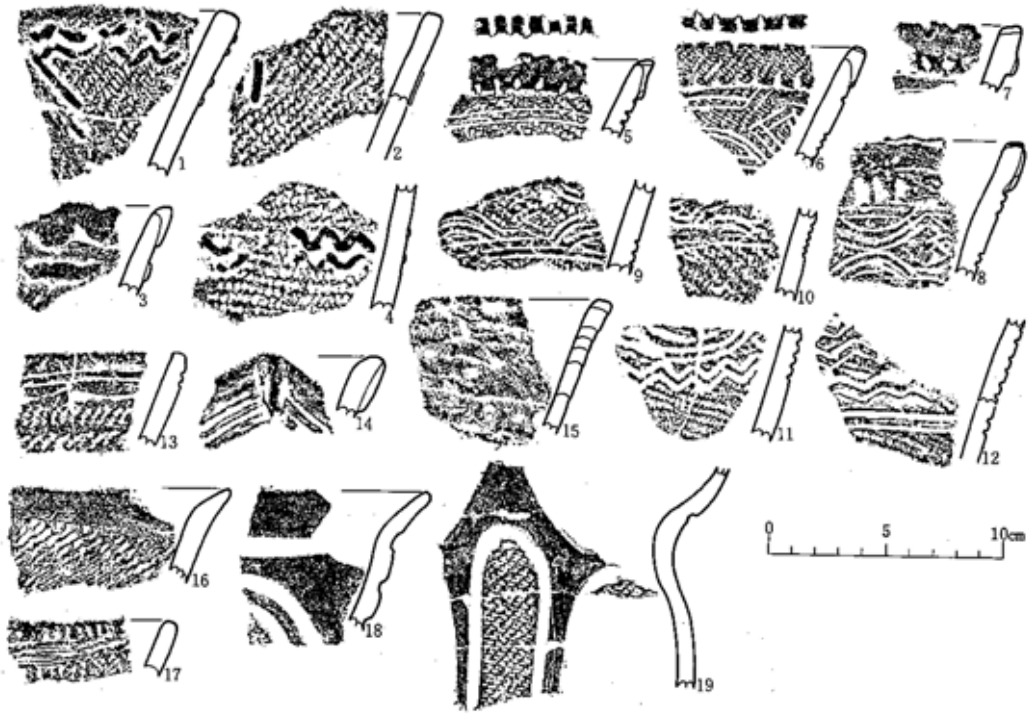
以上のような特徴をもつ土器は、宮城県柴田町上川名貝塚上層出土土器（加藤：1951）に共通する点が多く、縄文時代前期上川名II式（林：1965）に位置付けられる。

**第III群土器**（第 12 図 1〜4）

土器外面に粘土紐の貼付けによる文様をもつものである。

1〜3 は口縁部資料で、1 には縄文（LR）施文後、縦方向の文様と横方向への小波状文が組み合わされている。2 は縄文（LR）施文後、縦方向の文様が施されている。3 は口縁部が太い粘土紐の貼付けによって波状になっている。4 は胴部資料で縄文（LR）が施された後、横方向の小波状文が施されている。

このような特徴を持つ土器は宮城県七ケ浜町大木囲貝塚(八巻他：1979)、追町糠塚貝塚(興野：1968、1981)、名取市宇賀崎貝塚(阿部：1980)などから出土しており、縄文時代前期大木 4 式に位置付けられる。




| NO | 地区・層位 | 部位 | 縁線 | 口縁部 | 外面 | 内面 | 備考 | 所属土器群 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | CF−69−2層 | 口縁部 | なし | | 細い粘土紐貼付文，縄文（LR） | ナデ | | 第III群土器 | 5−21 |
| 2 | BT−60−2層 | 口縁部 | なし | | 細い粘土紐貼付文，縄文（LR） | ナデ | | 第III群土器 | 5−22 |
| 3 | CH−70−1層 | 口縁部 | なし | 太い粘土紐の貼付による波状線 | 細い粘土紐貼付文，縄文（LR） | ナデ | | 第III群土器 | 5−23 |
| 4 | CI−71−2層 | 胴部 | なし | | 細い粘土紐貼付文，縄文（LR） | ナデ | | 第III群土器 | 5−25 |
| 5 | CF−76−2層 | 口縁部 | なし | 肥厚，両端に刻目文 | 半截竹管による沈線文，縄文（RL） | ナデ | | 第IV群土器 | 5−25 |
| 6 | CH−75−1層 | 口縁部 | なし | 肥厚，両端に刻目文 | 半截竹管による沈線文 | ナデ | | 第IV群土器 | 5−26 |
| 7 | CE−78−2層 | 口縁部 | なし | 口唇部に刻目文 | 半截竹管による沈線文，横位隆線文，刻目文（隆線上） | ナデ | | 第IV群土器 | 5−24 |
| 8 | CD−75−1層 | 口縁部 | なし | 肥厚，両端に刻目文 | 半截竹管による沈線文，縄文 | ナデ | | 第IV群土器 | 5−27 |
| 9 | CK−75−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文，縄文（RL） | ナデ | | 第IV群土器 | 5−30 |
| 10 | CH−71−1層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文，縄文（RL） | ナデ | | 第IV群土器 | 5−29 |
| 11 | CF−88−1層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文，縄文（RL） | ナデ | | 第IV群土器 | 5−31 |
| 12 | CF−76−2層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文 | ナデ | | 第IV群土器 | 5−32 |
| 13 | BQ−84−1層 | 胴部 | なし | | 半截竹管による沈線文，貝殻腹縁文 | ナデ | | その他の土器 | 5−34 |
| 14 | BT−63−2層 | 口縁部 | なし | 波状縁 | 波頂部に縦位の貼付文，半截竹管による沈線文 | ナデ | | その他の土器 | 5−33 |
| 15 | CD−81−2層 | 口縁部 | なし | 肥厚 | 両面とも粘土紐調上げ痕残る | ナデ | | その他の土器 | 6−2 |
| 16 | CI−71−1層 | 口縁部 | なし | 内面に刻まれている。 | 縄文（LR） | 口縁部ナデ，他ナデ | | その他の土器 | 6−1 |
| 17 | CD−62−2層 | 口縁部 | なし | | 刺突文，条痕文 | ナデ | | その他の土器 | |
| 18 | CB−69−2層 | 口縁部 | なし | | 櫛歯縄文による縦長楕円文，縄文（LR） | ミガキ | 同一個体 | その他の土器 | 6−3 |
| 19 | CB−69−2層 | 胴部 | なし | | 櫛歯縄文による縦長楕円文，縄文（LR） | ミガキ | | その他の土器 | 6−4 |

第12図　縄文土器(7)

**第IV群土器**（第12図5〜12）

土器外面に主として半截竹管による文様が施されるものである。

5〜8は口縁部資料で、9〜12は胴部資料である。5・6・8は口縁部が肥厚し、その両端に刻目をもつ。7は口縁端部に刻目をもっている。半截竹管による文様には、直線状のもの（5・8・9・10・12）、弧状のもの（6・8・9・10・11）、山形状のもの（11・12）があり、これらが組み合わされたものが多い（6・8・9・10・11・12）。また、貼り付けた粘土紐の上を刻んだもの（7）もある。地文は5・12が斜行縄文（RL）、6・11が斜行縄文（LR）で他は不明である。

このような特徴を持つ土器は宮城県七ケ浜町大木囲貝塚(八巻他：1979)、迫町糠塚貝塚(興野：1968、1970ａ・ｂ、1981)、豊里町沼崎山遺跡(遊佐：1980)などから出土しており、縄文時代前期大木５式に位置付けられる。

大木５式は興野義一氏によって型式の細分がなされている（興野：1970ｂ、1981）。それによると大木５ｂ式は５ａ式の山形貼付文が山形沈線文にかわり、対弧文・刻線貼付などもみられるとされている。大木囲貝塚の調査成果によれば、この大木５ｂ式は確かに大木５式の層のなかでも上層から出土している（八巻他：1979）。以上のことから原頭遺跡第Ⅳ群土器は大木５ｂ式に位置付けられると思われるが、大木５ｂ式の層位的な発掘例が少ない現時点では、その可能性を指摘するにとどめる。

**その他の土器**（第12図13～19）

前述の土器群に含まれず出土点数も少ないものを一括した。

14～18は口縁部資料で、13、19は胴部資料である。13は２段の貝殻腹縁文の上下に半截竹管による沈線が巡るものである。15は粘土紐の輪積み痕を土器外面にそのまま残している。14は波状口縁の波頂部に粘土紐の貼付けをもち、その両側に半截竹管による文様が施されている。16は口縁部が内側に削がれ、外面には斜行縄文(ＬＲ)が施されている。17は条線の上下に細かい刺突が加えられている。18・19は同一個体で外面に沈線で縦長の楕円を描き、その中に斜行縄文（ＬＲ）を充填している。

以上のうち14は縄文時代前期大木６式に、18・19は縄文時代中期大木９式に位置付けられるが、13・15・16・17はその時期を特定できない。

**ｂ、石器**（第13図～第17図）

**石鏃**（第13図1～12・15）

13点出土した。うち完形品は３点である。基部の形態から２つに分けられる。

**平基のもの**（1～3）

１と３は側縁が外側にゆるく張り出している。双方とも横長の剥片を素材にして両面に二次加工を行ない整形している。１はその二次加工が両面とも中央部まで及んでいない。３はａ面に丁寧な二次加工が、ｂ面には周縁のみに二次加工が施されている。２は尖頭部が大きく欠けている。両面とも丁寧な二次加工がみられる。

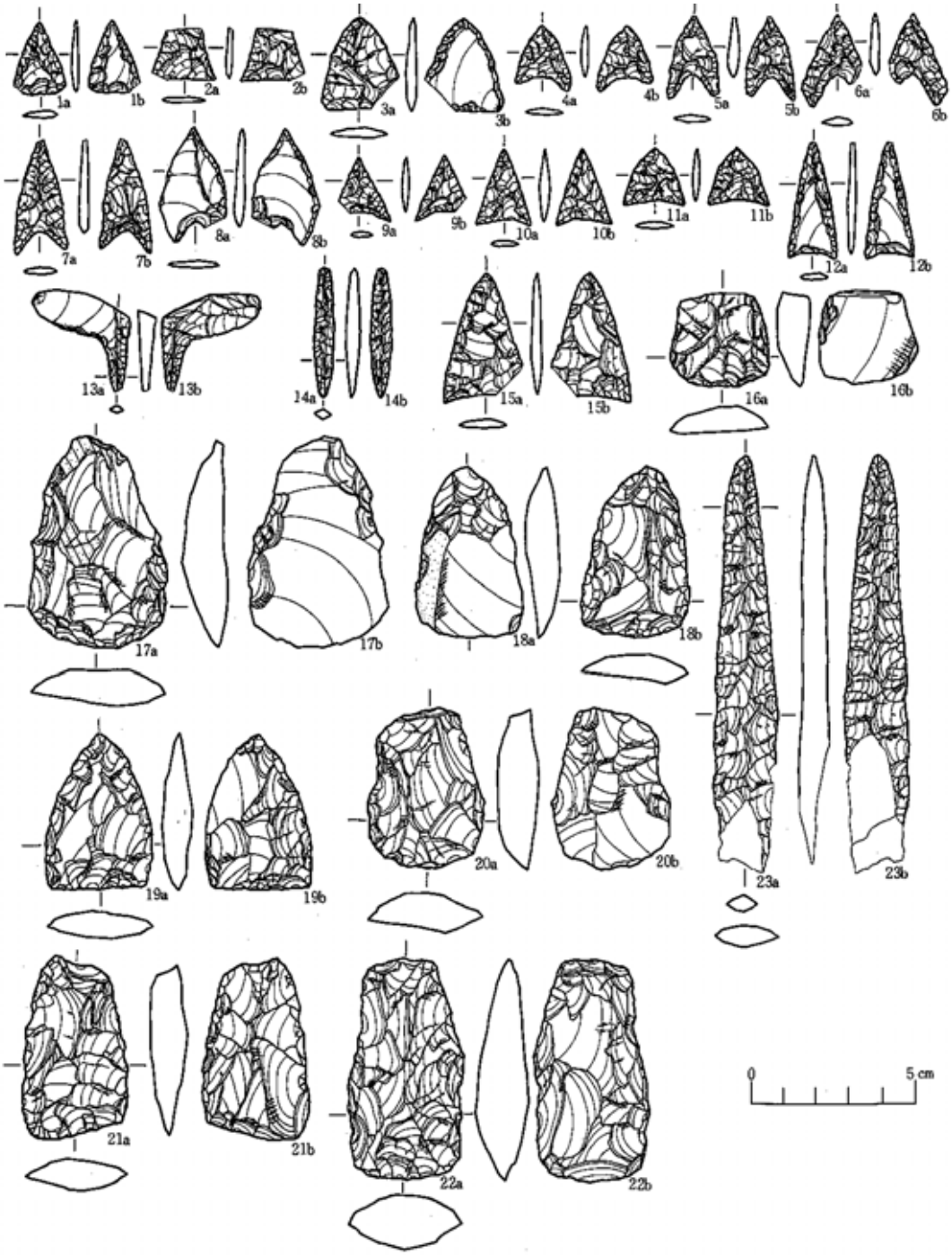
**凹基のもの**（4～12、15）

基部の内側への弯曲の度合いから２つに細分される。

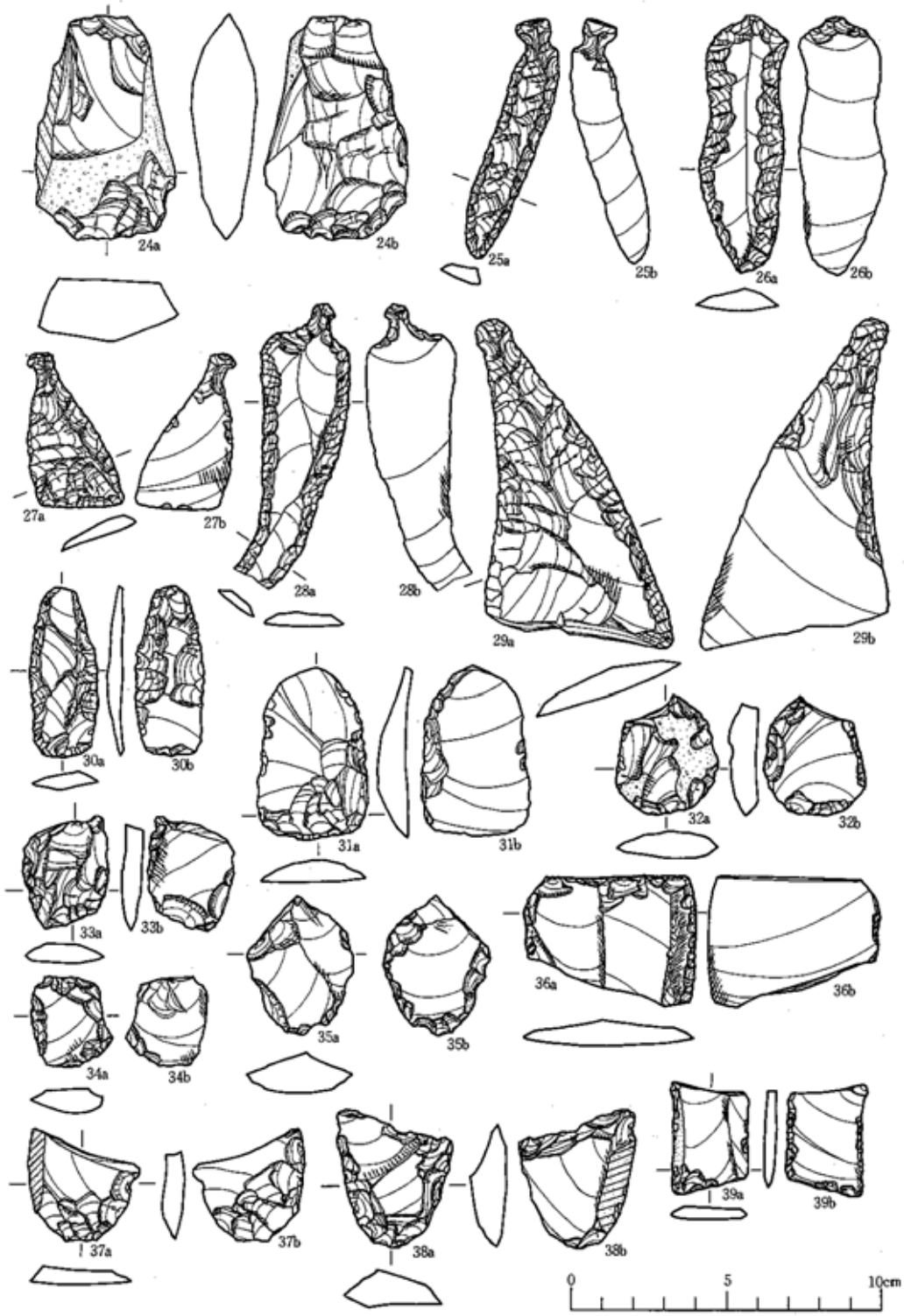
＜大きく内側に弯曲するもの＞（4～9）

側縁部は外側にゆるく張り出すもの（4・5・7・8）と直線的なもの（6・9）とがある。

4～7・9は何れも両面に丁寧な二次加工が施されている。このうち基部の抉りは９を除き∪


1a
1b
2a
2b
3a
3b
4a
4b
5a
5b
6a
6b
7a
7b
8a
8b
9a
9b
10a
10b
11a
11b
12a
12b
13a
13b
14a
14b
15a
15b
16a
16b
17a
17b
18a
18b
19a
19b
20a
20b
23a
23b
21a
21b
22a
22b
0
5 cm

第13図　石　　器(1)


24a
24b
25a
25b
26a
26b
27a
27b
28a
28b
29a
29b
30a
30b
31a
31b
32a
32b
33a
33b
34a
34b
35a
35b
36a
36b
37a
37b
38a
38b
39a
39b
0
5
10cm

第14図　石　器(2)

字形である。9 は基部の中央が直線的で、その側縁だけ斜方向に作り出されている。8 は縦長の剥片を素材にし、周縁に簡単な二次加工が施されている。

＜やや内側に弯曲するもの＞（10～12・15）

側縁部の形態は、外側にゆるく張り出すもの（11・15）と直線的なもの（10・12）とがある。10・11 は両面とも中央部まで及ぶ丁寧な二次加工が施されている。12 は横長の剥片を素材とし両面とも周縁部のみ二次加工で整形されている。15 は他と較べて大振りである。横長の剥片を素材とし、主に周縁部に二次加工が施されている。

**石錐**（第 13 図 13・14）

2 点出土している。13 は横長の剥片を素材とし、その縁辺に機能部をもっている。機能部は両面とも側縁からの二次加工で整形されている。14 は棒状のものである。全面に二次加工が施されている。双方とも、特に先端部付近に磨耗痕が認められる。

**石槍**（第 13 図 23）

1 点出土している。基部は欠損しているが、両面とも丁寧な二次加工が施されている。横断面は尖頭部、中央部とも菱形を呈している。尖頭部には磨耗痕が認められる。

**石鏃**（第 13 図 16～22）

7 点出土している。16 以外は完形品である。それぞれ程度の差こそあれ基部から先端部に向かってひらいている。二次加工は両面施されるものと片面は周縁部のみ施されるものとがあり、粗く大きな調整が目立っている。横断面形は蒲鉾状か凸レンズ状である。

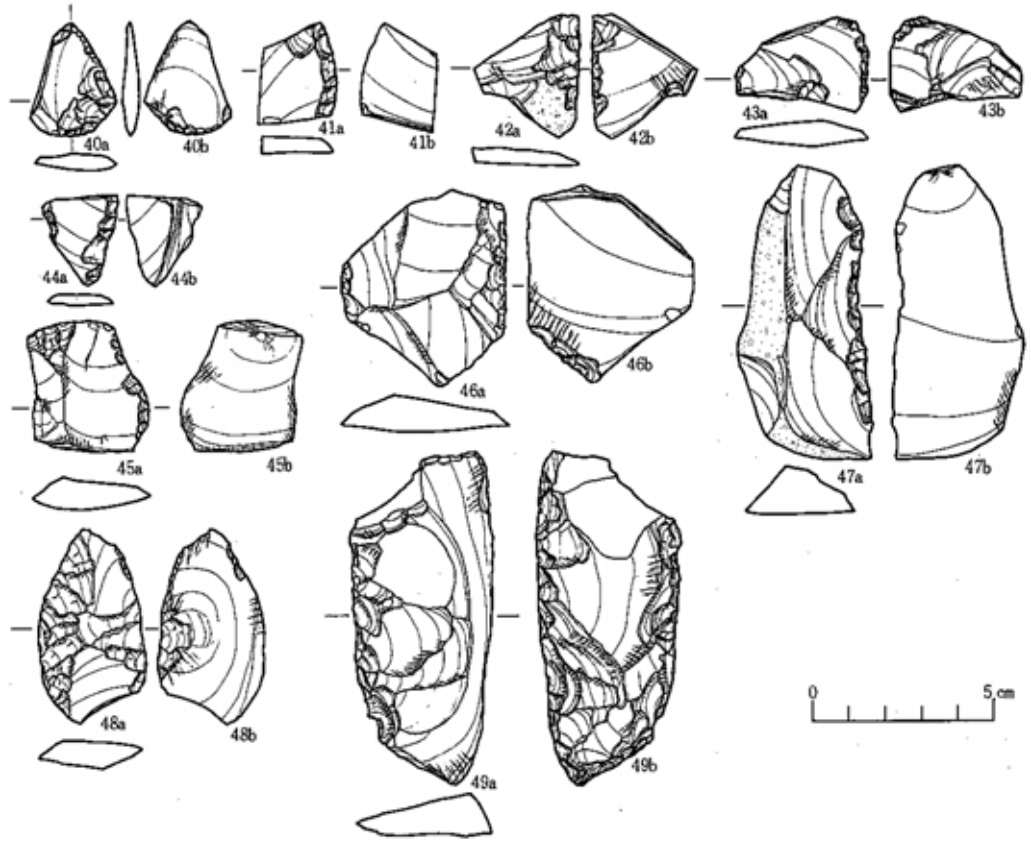
17～19 は基部から先端部へ向けて大きくひらいている。17・18 は縦長の剥片を、19 は横長の剥片を素材としている。17 は剥片の打撃面に近い方を先端部としている。20 は大きさの割に厚みがあり、両面とも粗い大きな剥離が施されている。21・22 は基部と先端部の幅に大きな差はなく、縦長である。双方とも両面に粗い大きな剥離がみられる。

**打製石斧**（第 14 図 24）

1 点出土している。基部から先端部へ向けてひらいている。両面とも二次加工が施されているが、粗く大きな調整なので大きく自然面を残すところもある。刃部は先端部にのみ設けられている。

**石匙**（第 14 図 25～29）

5 点出土している。そのうち完形品は 2 点ある。全て縦長の形態をとる。主要剥離面を見ると打撃面に近い方をつまみとしており、剥片の中でも厚みのある方につまみを作り出しているのがわかる。また、主要剥離面側に施す加工は、つまみと側縁部に移行する肩の部分にのみ見られる。a 面における二次加工は、27 のみ両側縁から中央部にまで施されているが、他は主として側縁部に施されている。5 点とも両側縁の先端部付近が特に磨滅している。



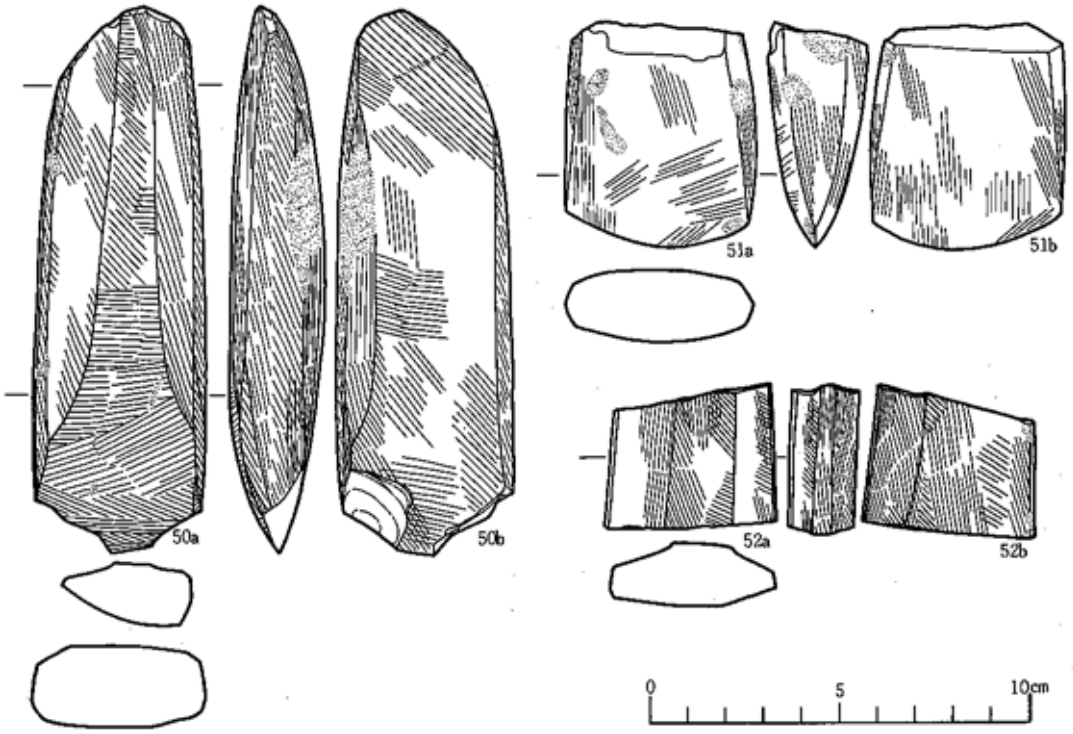

第15図　石　　器(3)

**その他の剥片石器**（第 14 図 30～第 15 図）

剥片の側縁や末端に簡単な二次加工が施されるものである。

30～39 は周縁部に丁寧な二次加工がみられる。30 は縦長の薄い剥片を素材とし、主に両側縁に二次加工が施されている。31 は縦長の剥片を素材とし、ａ面の右側縁や先端部、ｂ面の左側縁に二次加工が施されている。先端部には細かな刃こぼれ状の剥離が認められる。32～35 は縦長の剥片を素材とし、周縁の 3 辺に二次加工が施されている。33 はａ面の右側縁上端に嘴状の突起が作り出されている。36 は縦長の剥片を素材とし、ａ面の両側縁に二次加工が施されている。37・38 は片面の側縁に節理面が残るものである。37 は縦長の剥片を、38 は横長の剥片を素材にしている。双方とも節理面を除いて二次加工が施されている。39 は縦長の剥片を素材とし、主としてｂ面の両側縁に二次加工が施されている。ａ面の左側縁には自然面が残る。

40～46 は不定形な剥片の一部に二次加工が施されているものである。いずれも縦長の剥片を素材にしている。47 は縦長の剥片を素材とし、ａ面の右側縁に二次加工が施されている。48・49 は横長の剥片を素材にしている。48 はａ面の主として左側縁に二次加工が施され、ｂ面はバ




第16図　石　　器(4)

ルブ除去のための剥離が入っている。49 は粗い大きな剥離で形が整えられ、ａ面は左側縁に、ｂ面は両側縁に二次加工が施されている。

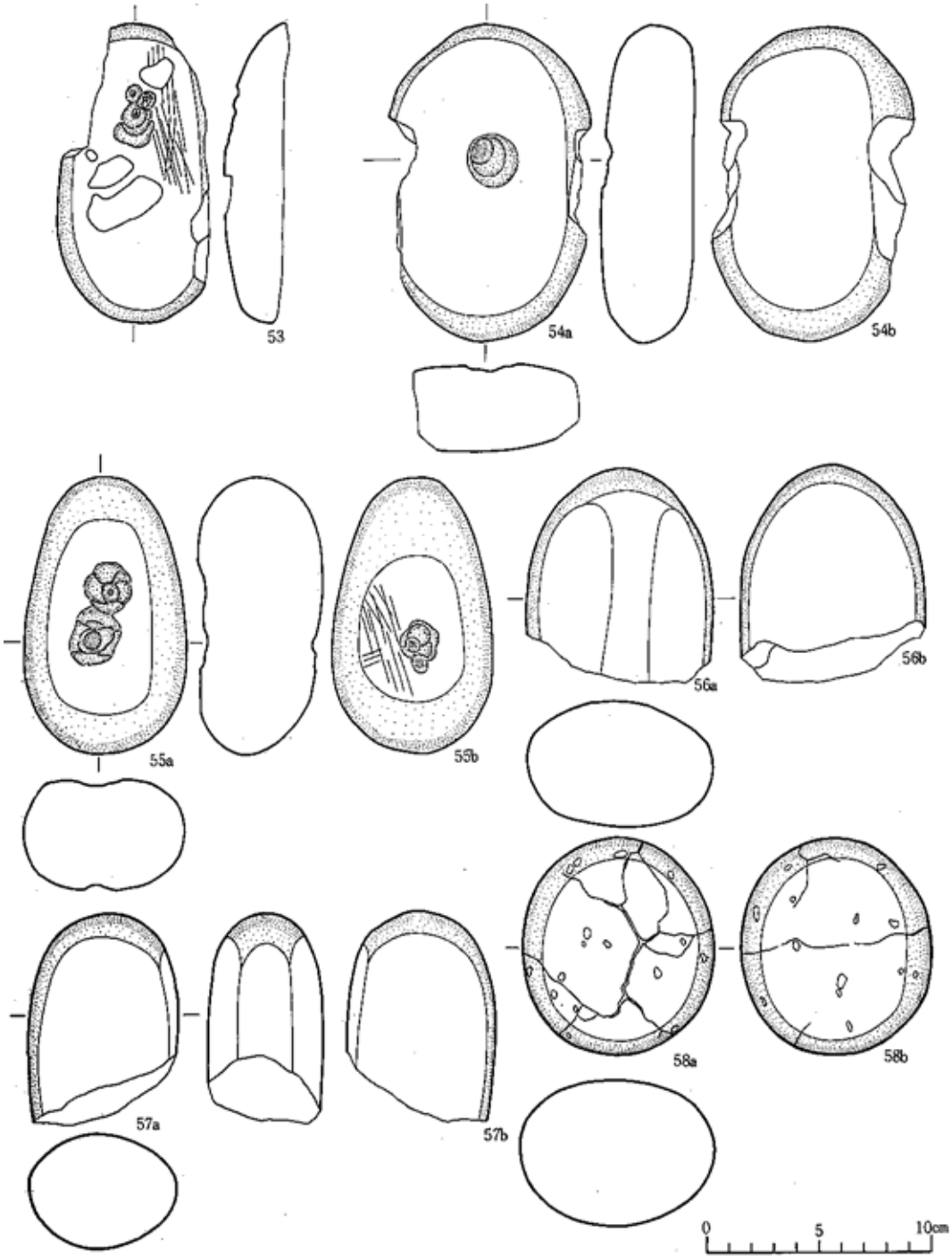
**磨製石斧**（第 16 図 50～52）

3 点出土している。うち完形品は 1 点だけである。50 は基部から刃部へ向かってゆるやかにひらき、最大幅は刃部付近にある。横断面は上下に膨らみをもつ長方形で、側縁部は明瞭な稜を形成している。刃部は外弯刃で両刃である。刃部両側縁は破損している。破損後、基部を研いで再利用している。再利用の際の刃部は片刃で、それも片側縁にだけ設けられている。51 は刃部付近の被片である。刃部は外弯刃で両刃である。横断面は上下に膨らみをもつ長方形で、側縁部は明瞭な稜を形成している。52 は基部付近の破片である。横断面をみると上下に明瞭な稜がついている。

**凹石**（第 17 図 53～55）

3 点出土している。このうち完形品は 1 点だけである。3 点とも凹みの他に磨痕が認められる。平面形は楕円形のもの（55）と長楕円形のもの（54）とがある。

53 は片面が破損している。凹部は石器の中央より片偏った所にあり、平面形は不整形で横断面は凹凸のある浅いものである。54 は上下とも幅の広い磨痕が認められる。凹部の平面形は円




第17図　石　　器(5)

形で、横断面は凹凸のある浅いものである。55 は上下両面に凹部があり、その位置は双方とも石器のほぼ中央である。ａ面の凹部は 2 つあり、その平面形は不整形で横断面は凹凸のある浅いものである。ｂ面の凹部の平面形は不整形で横断面は∪字形である。

**磨石**（第 17 図 56〜58）

3 点出土している。このうち完形品は 1 点である。平面形には円形に近いもの（58）と楕円形のもの（56・57）とがある。磨痕はいずれも上下両面に認められるが、57 は側面の片側にも認められる。

以上の石器の所属時期であるが、原頭遺跡出土土器の 7 割を上川名Ⅱ式土器が占めているので、縄文時代前期初頭のものが多いと思われる。

## Ⅳ. 考　察　－第Ⅰ群土器について－

第Ⅱ群土器は胎土に植物繊維を含む土器群で、原頭遺跡出土土器中最も出土量が多く全体の 7 割を占めている。器種は全て深鉢である。

口頸部の形態はA）頸部でくびれ口縁部が内弯もしくは内傾し、波状縁のもの　B）頸部でくびれ口縁部が内弯もしくは内傾し、平縁のもの　C）口縁部が直立気味になるもの　D）ほぼ直線的に外傾するものの 4 タイプがある。胴部はやや膨らむものと外傾するものとがあり、底部は平底もしくは丸底風平底で底面には縄文が施されている。

口縁部資料をみると、外面に地文以外の文様をもつものと地文のみ施されるものがあり、口頸部の形態との関係は前者がA〜D全てのタイプがあるのに対し後者はDのみで、口縁部に文様をもつ土器の方が器形的にバラエティに富んでいる。

文様は大きくみて①平行な撚糸圧痕文、または沈線文、②①＋短沈線文、または刻目文、③②＋撚糸圧痕や沈線による渦巻状の文様、④②＋撚糸圧痕や沈線による蕨状の文様、⑤短沈線や刻目をもつ隆線文、または粘土紐貼付文の 5 種類に分かれる。文様をもつ土器は文様帯が広いもの（Ⅰ）と狭いもの（Ⅱ）があり、口頸部の形態と文様との関係は以下の様になる。

ＡⅠ　③＋⑤
ＡⅡ　⑤＋？（小破片のため不明）
ＢⅠ　③
ＢⅡ　① or ②
ＣⅠ　③ or ④
ＣⅡ　① or ②
ＤⅠ　③
ＤⅡ① or ②

石鏃・石槍

| NO | 地区・層位 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 欠損 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | CE−80−1層 | (21.25) | (15.75) | 3.2 | (0.7) | 先端部及び基部 | 6−5 |
| 2 | CI−70−2層 | (16.4) | (19.65) | 2.35 | (0.7) | 尖頭部及び基部 | 6−6 |
| 3 | CH−70−1層 | (28.75) | (24.95) | 3.7 | (2.4) | 基部 | 6−7 |
| 4 | CM−71−1層 | (21.1) | (17.15) | 2.95 | (0.65) | 先端部 | 6−8 |
| 5 | CE−73−1層 | (26.2) | (15.65) | 4.65 | (1.2) | 先端部及び基部 | 6−9 |
| 6 | CB−80−1層 | (27.7) | (19.0) | 4.35 | (1.2) | 尖頭部及び基部 | 6−10 |
| 7 | CE−71−2層 | (35.25) | (16.3) | 3.9 | (1.7) | 先端部 | 6−12 |
| 8 | CC−81−2層 | (35.6) | (20.65) | 3.85 | (2.2) | 基部 | 6−13 |
| 9 | CB−82−2層 | (20.0) | 16.75 | 2.25 | (0.5) | 先端部及び基部 | 6−11 |
| 10 | CC−79−2層 | 23.45 | 17.1 | 3.4 | 0.9 | | 6−14 |
| 11 | CH−70−2層 | 17.85 | 18.8 | 2.75 | 0.75 | | 6−15 |
| 12 | CG−70−2層 | (36.0) | 14.9 | 3.25 | (1.3) | 先端部 | 6−16 |
| 15 | CF−70−2層 | (39.85) | (24.85) | 3.8 | (2.8) | 基部 | 6−19 |
| 23 | CC−73−2層 | (120.85) | (19.35) | 9.2 | (20.2) | 基部 | 6−30 |

石錐

| NO | 地区・層位 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 尖頭部長 (mm) | 重量 (g) | 欠損 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | BI−89−1層 | 40.0 | 6.95 | 4.5 | —— | (1.2) | 先端部 | 6−17 |
| 14 | CC−76−2層 | (29.4) | 30.3 | 6.6 | (26.1) | (2.2) | 先端部 | 6−18 |

石篦・打製石斧

| NO | 地区・層位 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 刃部角度 (左・右・先) | 重量 (g) | 欠損 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 16 | CC−76−2層 | (30.35) | (30.8) | (11.2) | (54°・56°・48°) | (11.1) | 基部 | 6−20 |
| 17 | CC−77−2層 | 65.7 | 42.85 | 15.3 | (67°・52°・43°) | (41.3) | 刃部 | 6−23 |
| 18 | CB−82−2層 | 53.1 | 33.1 | 13.2 | (44°・67°・55°) | 20.7 | | 6−22 |
| 19 | CF−73−2層 | 45.5 | 33.1 | 9.7 | (60°・42°・47°) | 14.3 | | 6−21 |
| 20 | CB−75−1層 | 49.4 | 36.2 | 16.65 | (66°・73°・68°) | 29.3 | | 6−24 |
| 21 | CB−64−2層 | 56.9 | 53.35 | 12.0 | (60°・44°・33°) | (21.1) | 基部 | 6−25 |
| 22 | CF−71−2層 | (68.8) | 35.1 | 16.9 | (71°・69°・50°) | (39.3) | 刃部 | 6−26 |
| 24 | CJ−72−2層 | 72.45 | 45.3 | 26.15 | (—・—・54°) | 82.0 | | 6−27 |

石斧

| NO | 地区・層位 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 刃部角度 (左・右・先) | 重量 (g) | 欠損 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 25 | CJ−71−2層 | 81.0 | 15.6 | 6.7 | (44°・71°・58°) | 10.7 | | 6−34 |
| 26 | BN−85−1層 | 83.1 | 27.1 | 7.05 | (44°・40°・54°) | (18.1) | つまみ部 | 6−28 |
| 27 | BM−92−1層 | 56.2 | 28.3 | 7.4 | (60°・35°・22°) | 9.9 | | 6−29 |
| 28 | BN−86−1層 | (93.7) | (29.35) | 6.85 | (47°・50°・—) | (16.8) | 刃部 | 6−33 |
| 29 | BO−84−1層 | (120.55) | (61.2) | (7.35) | (49°・34°・—) | (44.3) | 刃部 | 6−35 |

その他の剥片石器

| NO | 地区・層位 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 刃部角度 (上・下・左・右) | 重量 (g) | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 30 | BO−84−1層 | 55.2 | 22.4 | 6.85 | (—・51°・50°・64°) | 9.3 | 6−31 |
| 31 | CD−74−2層 | 55.8 | 36.6 | 12.25 | (—・71°・—・58°) | 21.4 | 6−32 |
| 32 | CH−72−1層 | 37.45 | 33.0 | 10.5 | (—・75°・44°・66°) | 12.9 | 7−1 |
| 33 | CG−78−2層 | 37.8 | 28.2 | 8.3 | (—・43°・53°・39°) | 8.2 | 7−2 |
| 34 | CA−82−2層 | 29.5 | 22.55 | 8.1 | (—・—・—・58°) | 6.7 | 7−3 |
| 35 | CD−83−2層 | 44.95 | 34.05 | 12.6 | (—・51°・56°・49°) | 15.3 | 7−8 |
| 36 | BO−84−1層 | 40.5 | 54.0 | 7.25 | (—・—・39°・41°) | 25.9 | 7−11 |
| 37 | CH−70−2層 | 31.6 | 36.6 | 7.4 | (—・42°・41°・—) | 9.6 | 7−9 |
| 38 | CF−79−1層 | 41.65 | 37.4 | 11.65 | (56°・72°・67°・68°) | 14.1 | 7−10 |
| 39 | CB−80−2層 | 36.9 | 25.85 | 3.75 | (—・38°・53°・47°) | 6.5 | 7−4 |
| 40 | CB−77−1層 | 31.5 | 23.7 | 6.65 | (51°・58°・33°・—) | 3.6 | |
| 41 | CG−70−2層 | 26.2 | 21.4 | 6.35 | (—・—・41°・—) | 4.5 | 7−5 |
| 42 | BO−84−1層 | 32.25 | 30.15 | 3.2 | (—・—・49°・—) | 5.7 | 7−6 |
| 43 | CJ−72−2層 | 27.05 | 37.7 | 7.35 | (—・—・63°・44°) | 7.9 | |
| 44 | BO−84−1層 | 22.5 | 19.0 | 1.55 | (—・—・44°・71°) | 1.9 | 7−7 |
| 45 | CB−77−2層 | 37.0 | 32.3 | 10.4 | (—・—・27°・—) | 9.7 | 7−13 |
| 46 | BO−84−1層 | 53.4 | 45.3 | 10.55 | (—・63°・42°・66°) | 26.4 | 7−12 |
| 47 | CJ−70−2層 | 81.4 | 36.8 | 13.55 | (—・—・56°・—) | 40.7 | |
| 48 | CH−70−2層 | 52.45 | 29.6 | 8.5 | (—・—・36°・51°) | 10.0 | |
| 49 | CF−78−2層 | 91.85 | 39.7 | 13.65 | (—・—・46°・—) | 51.7 | |

磨製石斧

| NO | 地区・層位 | 長さ (mm) | 刃部幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 欠損 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50 | BP−84−1層 | 142.45 | 45.0 | 23.65 | 240.0 | 刃部 | 7−16 |
| 51 | CE−71−2層 | (58.4) | 51.6 | (26.4) | (116.0) | 基部 | 7−15 |
| 52 | BP−84−1層 | (36.6) | — | (17.1) | (58.0) | 刃部及び基部 | 7−14 |

凹石・磨石

| NO | 地区・層位 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 備考 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 53 | CH−70−2層 | (133.8) | (66.2) | (25.6) | (255) | 片面が破損 | |
| 54 | CH−70−2層 | 139.5 | (90.4) | 39.0 | (630) | 周側縁が破損 | 7−20 |
| 55 | CG−70−2層 | 120.1 | 71.65 | 52.2 | 560 | 凹部3ヶ所 | 7−17 |
| 56 | CF−69−2層 | (97.35) | (83.7) | (55.9) | (485) | 破損品 | 7−18 |
| 57 | CF−70−2層 | (93.45) | (66.25) | (52.6) | (475) | 破損品 | |
| 58 | CB−77−2層 | 96.9 | 85.45 | 64.9 | 680 | | 7−19 |

第1表　石器観察表

地文は文様をもつ土器の胴部にも認められるため、全ての土器に施されていたと思われる。その内容は0段多条の縄文が大部分を占め、撚糸文は非常に少なくループ文・組紐回転文はない。縄文は非結束の羽状縄文が多く、斜行縄文・結束の羽状縄文は少ない。縄文原体の末端が縛られているものもある。

内面の調整は文様をもつ土器がミガキが多く、地文のみの土器はナデが多い。擦痕は双方に認められるが数は少ない。

このような特徴をもつ第Ⅱ群土器は宮城県柴田町上川名貝塚上層出土土器（加藤：1951）に共通する点が多く、縄文時代前期上川名Ⅱ式に位置付けられる。原頭遺跡周辺で報告された同時期の遺跡としては宮城県嶋瀬町金山貝塚（嶋瀬町教委：1977）、七ケ浜町左道貝塚（白鳥：1979）、名取市宇賀崎貝塚（阿部：1980）、柴田町上川名貝塚（前出）、山形県米沢市八幡原No26遺跡（手塚：1975）などがある。

これらの遺跡のうち出土量の多い上川名貝塚、宇賀崎貝塚、左道貝塚、金山貝塚の土器と原頭遺跡第Ⅱ群土器とを比較し、第Ⅱ群土器のもつ特徴を考えてみたい。

上川名貝塚では本遺跡で多くみられる口縁部が内弯もしくは内傾する土器は少なく、外反もしくは外傾する土器がほとんどとされている。底部は丸底と揚底風丸底があり、底面に縄文や撚糸文・竹管刺突文が施されているものがある。これに対し原頭遺跡の底部は平底もしくは丸底風平底で、底面には縄文が施されている。

口縁上端に刻目が施される土器は双方とも多い。また撚糸圧痕や沈線によって文様が描かれる土器も双方に特徴的に認められるが、上川名貝塚には本遺跡にはみられない同心円形の文様や竹管による円形刺突文がある。地文は羽状縄文が多く斜行縄文がこれに次ぐ点は共通しているが、撚糸文が施された土器が上川名の場合、原頭より多く認められ、原体の施文方向も上川名例は横もしくは斜めが多いのに対し、原頭例は縦である。また、上川名貝塚には原頭遺跡にはない末端ループ文・網目状撚糸文がある。

宇賀崎貝塚、左道貝塚、金山貝塚の土器には原頭遺跡の特徴である文様が施される土器が少なく、口頸部の形態でも頸部がくびれ口縁部が内弯もしくは内傾するタイプが少ない。底部は平底と丸底があり、底面には縄文の他に撚糸文(金山貝塚)や竹管刺突文(宇賀崎貝塚、金山貝塚)が施されるものがある。これに対し原頭遺跡の皮部は平底もしくは丸底風平底で、底面には縄文だけが施されている。

口縁上端に刻目が施される土器は双方とも多い。しかし、原頭遺跡に多い文様をもつ土器は3貝塚には少なく、そのかわり3貝塚にみられる竹管による円形刺突文は原頭ではみられない。地文は双方とも羽状縄文が多く、斜行縄文がこれに次いでいる。しかし3貝塚には原頭にはない末端ループ文、網目状撚糸文、組紐回転文がある。

以上をまとめると原頭遺跡第Ⅱ群土器と上川名貝塚、宇賀崎貝塚、左道貝塚、金山貝塚出土土器には1）底部が平底で底面に縄文が施される土器がある。2）沈線や撚糸圧痕で文様が施される土器がある。3）口縁上端に刻目が施される土器が多い。4）地文は羽状縄文が最も多く、斜行縄文がこれに次ぐ、という共通点がある。

この反面、1）口頸部の形態で原頭に多くみられる頸部がくびれ、口縁部が内弯もしくは内傾するタイプが4貝塚に少ない。2）4貝塚にある丸底や底面に撚糸文・竹管刺突文が施される土器は原頭には存在しない。3）上川名貝塚を除く3貝塚には原頭に多い文様が施される土器が少ない。4）4貝塚にみられる竹管による円形刺突文は原頭遺跡にはない。5）4貝塚にみられる地文の末端ループ文、網目状撚糸文は原頭にはない。また、宇賀崎や左道、金山貝塚にある組紐回転文も原頭にはない。などの相違点がある。

このように原頭遺跡第Ⅱ群土器は上川名Ⅱ式に位置付けられながらも、土器群の内容が同時期と考えられる上川名貝塚、字賀崎貝塚、左道貝塚、金山貝塚のいずれとも異なっている。この違いが時期差であるのか、それとも地域差によるものなのかは上川名Ⅱ式期に属する遺跡の発掘例が少ない現時点では不明である。

## Ⅴ．ま　と　め

(1)　原頭遺跡は白石川北岸の河岸段丘上に立地し、遺跡内は南東へ向かって緩やかに傾斜している。

(2)　発見された遺構は竪穴遺構１基、土壙１基であるが、何れも年代、性格等は不明である。

(3)　発見された遺物には縄文土器と石器がある。縄文土器の7割は前期上川名Ⅱ式土器が占めていることから石器も同時期のものが多いと思われる。他に時期のわかる縄文土器としては早期・中期・後期のものがある。

## ＜引用・参考文献＞　（五十音順）


阿部　　恵（1980）：「宇賀崎貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第67集

伊東　信雄（1940）：「素山貝塚調査報告」『東北大学法文学部奥羽資料調査部研究報告第二』

岩渕・佐藤・梶原（1980）：「三神峯遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第25集

加藤　　孝（1951）：「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』1

興野　義一（1967～1970ａ）：「大木式土器理解のために（Ⅰ）～（Ⅵ）」『考古事ジャーナル』13・16・18・24・32・48号

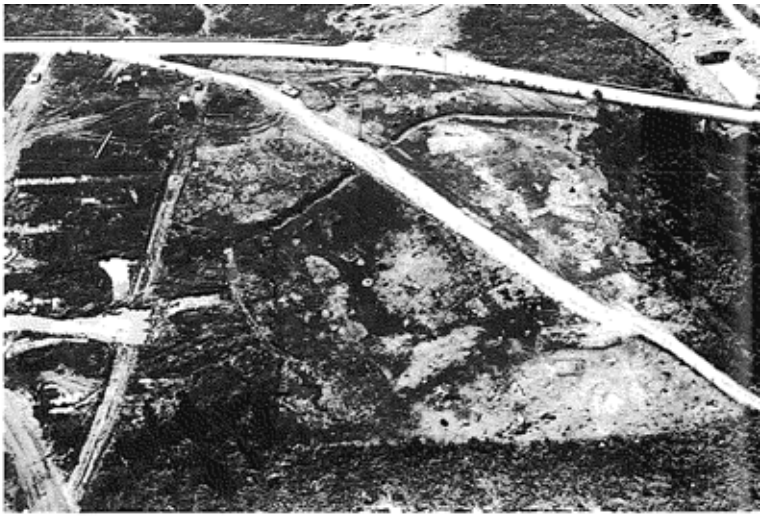
（1970ｂ）：「大木5ｂ式土器の提唱」『古代』第22巻第4号

（1970ｃ）：「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」『古代文化』第22巻第11号

（1981）：「糠塚貝塚について」『迫町史』

桑山・吉田（1964）：「常世遺跡1・2」『福島県史』6
後藤　勝彦（1969）：「南境貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第20集
白鳥　良一（1977）：「宮城県七ケ浜町左道貝塚の縄文前期土器について」『宮城史学』第6号
鈴鹿　良一（1981）：「岩下向遺跡」『飯館村文化財調査報告書』第2集
（1983）：「松ケ平Ａ遺跡（第1次）」『福島県文化財調査報告書』第118集
（1984）：「松ケ平Ａ遺跡（第2次）」『福島県文化財調査報告書』第129集
手塚　　孝（1975）：「八幡原No26遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財報告書』第1集
鳴瀬町教育委員会（1977）：「金山貝塚」『鳴瀬町文化財調査報告書』第1集
芳賀　英一（1975）：「常世遺跡の早期縄文式土器に就いて」『遮光器』9号
（1977）：「常世遺跡出土の早期縄文土器をめぐる2・3の問題」『福島考古』第18号
（1981）：「常世式土器の再検討（一）」『福島考古』第22号
秦　昭繁他（1978）：「松原」置賜考古学会
林　　謙作（1960）：「宮城県桂島貝塚出土の前期縄文式土器群」『考古学雑誌』第46巻第3号
（1962）：「東北地方早期縄文式文化の展望」『考古学研究』第9巻第2号
（1968）：「縄文文化の発展と地域性　2、東北」『日本の考古学』Ⅱ
馬目・吉田他（1982）：「竹之内遺跡」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第8冊
八巻・小林・梶原（1979）：「大木囲貝塚―昭和52年度環境整備報告―」『七ケ浜町文化財調査報告書』第4集
山内　清男（1929）：「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第1巻第2号
（1929）：「斜行縄文に関する二・三の考察」『史前学雑誌』第1巻第2号
「繊維土器について　追加第1」『史前学雑誌』第1巻第3号
「繊維土器について　追加第2」『史前学雑誌』第2巻第1号
遊佐　五郎（1980）：「沼崎山遺跡」『豊里町文化財調査報告書』第2集

遺跡航空写真



基本層位

竪穴遺構、土壙

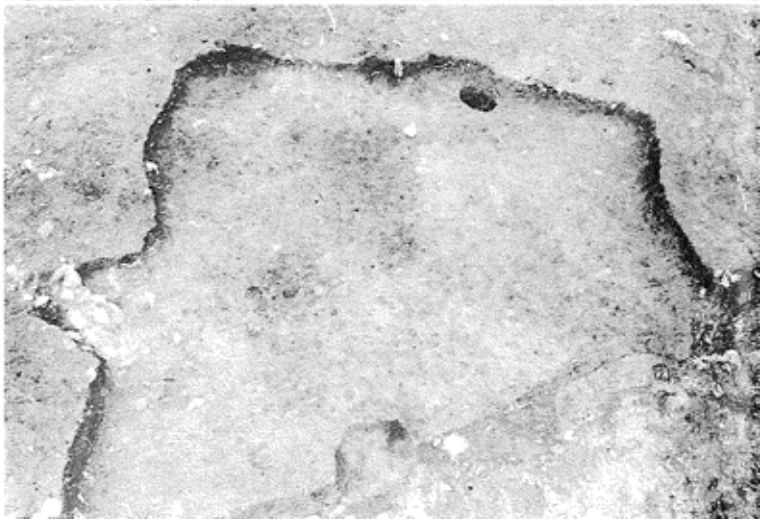


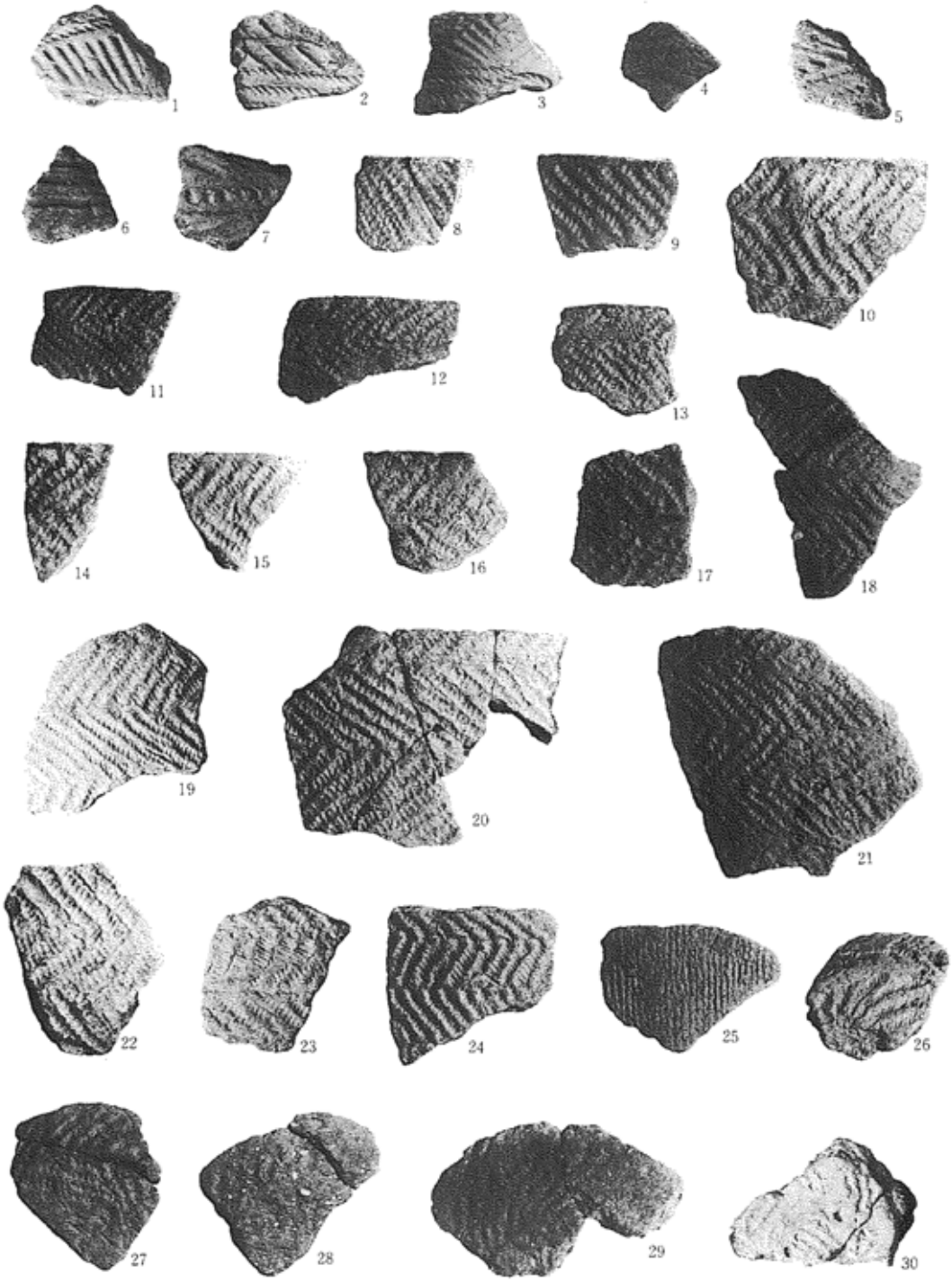
図 版 1

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

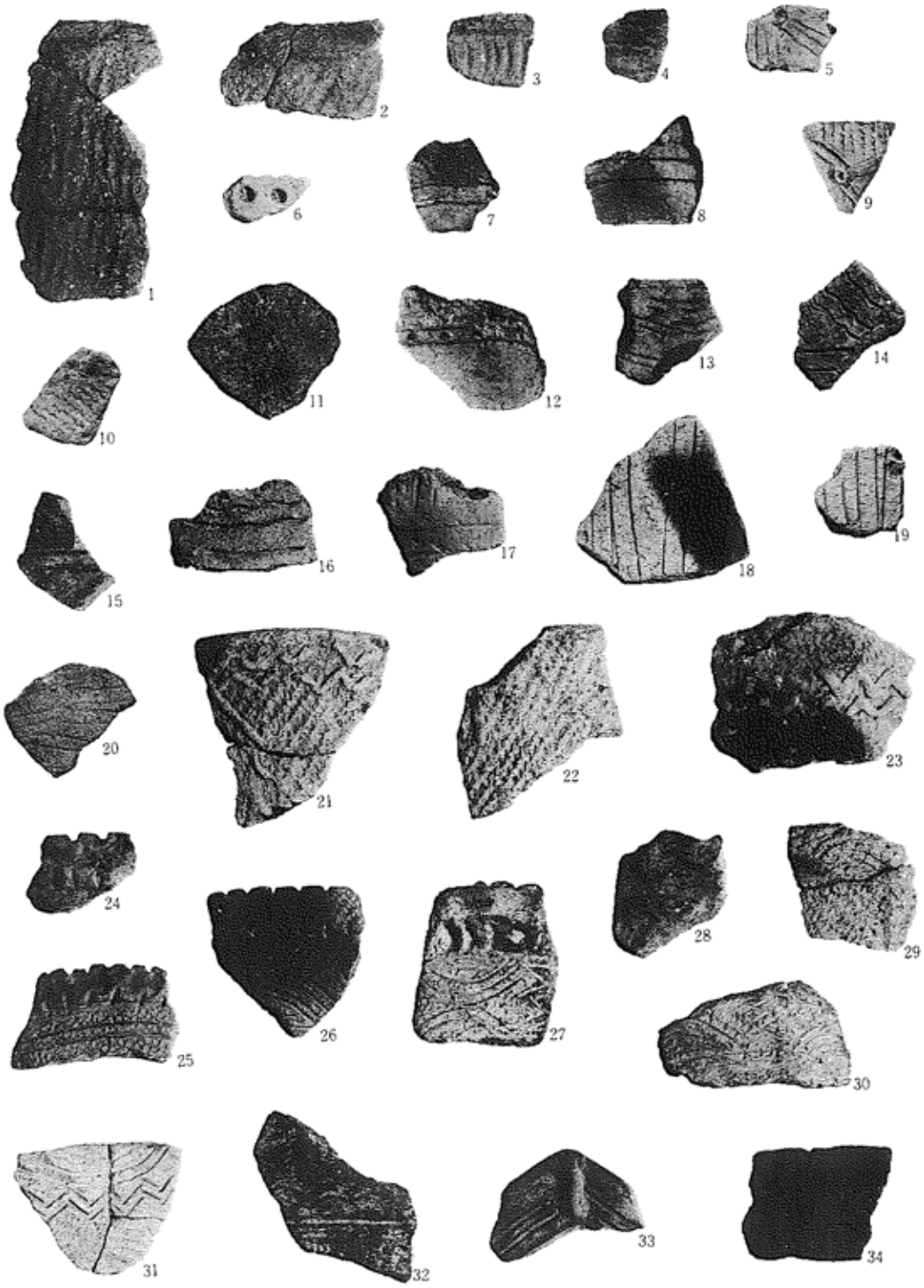
図版２　出土遺物(1)

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

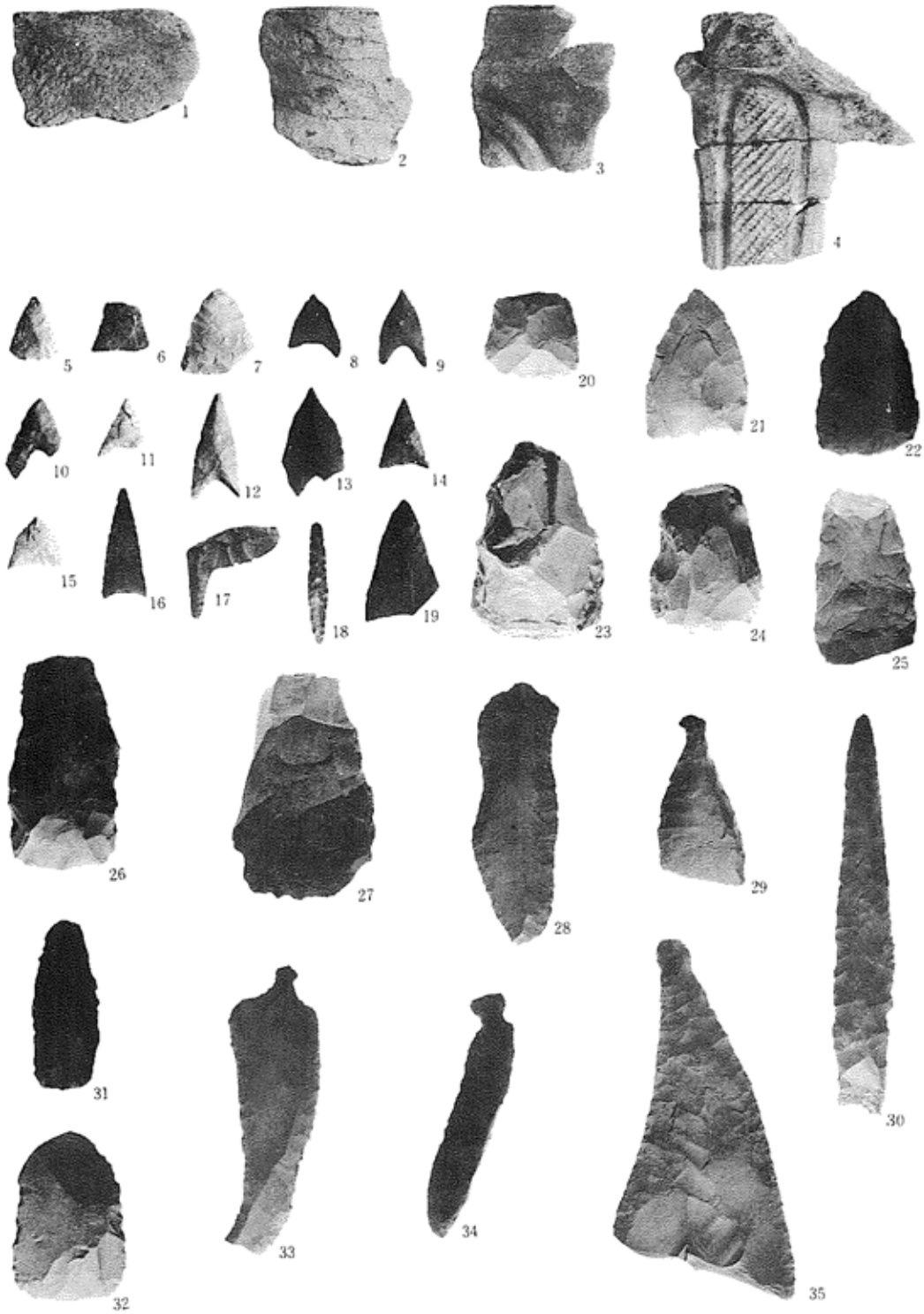
図版３　出土遺物(2)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

図版 4　出土遺物(3)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

図版 5　出土遺物(4)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
20
21
22
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35

図版６　出土遺物(5)

図版７　出土遺物(6)

# (3) 養源寺跡

# 調　査　要　項

遺跡所在地：宮城県刈田郡七ヶ宿町渡瀬

調査期間：昭和 60 年 7 月 22 日～7 月 27 日

調査主体者：宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：平沢英二郎、新庄屋元晴

調査対象面積：1000 ㎡

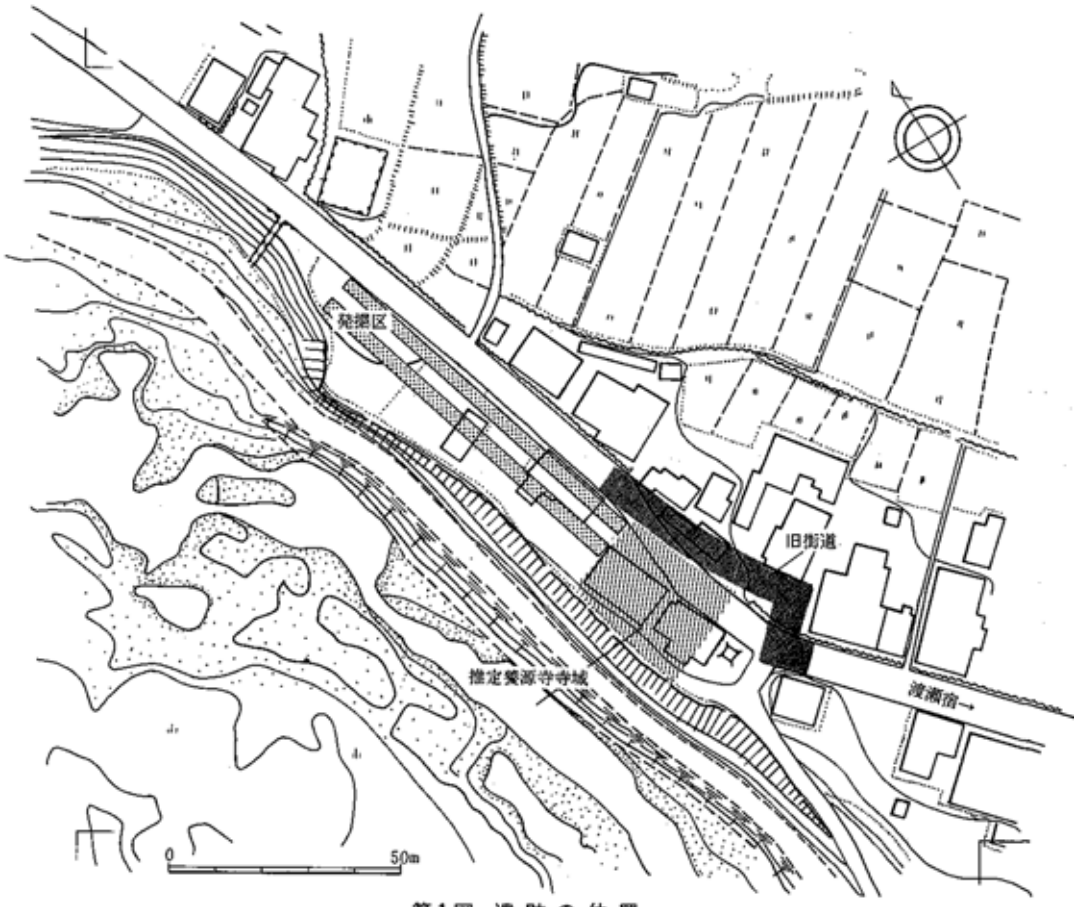
調査面積：480 ㎡

# Ⅰ　遺跡の位置と環境

養源寺遺跡は七ヶ宿渡瀬に所在する真言宗大木山歌昌院養源寺跡である。

渡瀬の集落は七ヶ宿の宿場の一つで、南北にのびる四間幅の道路を中心に町並が形成されている。渡瀬宿は北側が高く南側が低い地形的特徴から北側が町頭、南側が町尻と称される。明治18～19年の地籍図をみると、古くは道路が、集落の北端、町頭口で鉤の手に曲折しており、このつきあたりに養源寺の位置が記されている（第1図）。

養源寺の開山は不明だが、『安永風土記』の書出に延文年中（1316～1360年）に順音法印によって中興されたとあるのが最も古い記録である。同書中に竪互間、横三間の東向きの客殿がある旨の記載がある。その後天明2年（1782年）に本堂庫裏が大被して無住となり、明治6年11月に白石市小原大戸沢の清光寺に合併した。養源寺境内にあった石碑は瀬見原に移転されている（七ヶ宿町1978）。




第1図　遺跡の位置

# Ⅱ 遺 跡 の 調 査

養源寺跡と推定される範囲には現在公民館があり、その基礎のコンクリートのために遺跡の主要部は調査できなかった。発掘区は遺跡の北部に道路と平行に、幅3m長さ80mのトレンチを2本設定した。

調査の結果、北側に遺構の分布はみとめられなかった。なお、表土中より出土した遺物は以下のとおりである。

第2図は、縄文土器である。小形の土器で上端は粘土帯のつぎめで破損しているようである。文様の特徴から大木9式のものと思われる。

写真図版1〜3は山形県平清水焼である。1、3は磁器であり、1は菊皿で内面に山水風の呉須染付がある。3は角皿（手塩皿）の口縁部で型による葉の文様がある。2は片口鉢であり、明治以降の平清水焼で、磁器のようにみせるために用いられた「エンゴベー」（白い化粧土）の手法が認められる。平清水焼の創始年代は文化年間といわれ、弘化六年に磁器生産を開始している。4、5はすり鉢、6は湯呑茶碗である。

7は小柄である。刀鞘の側面にはめこまれる小刀の柄である。刃部は破損してない。柄部は幅15㎜厚さ5㎜で中央にホタテとアワビを描いたうち出しがある。

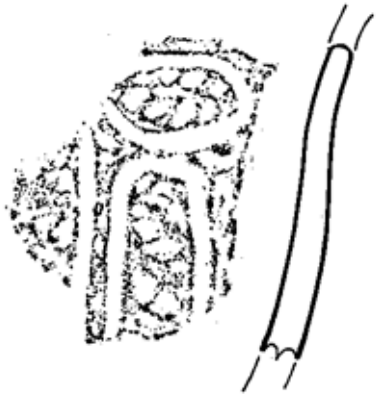
上記の他に、石器剥片1点、須恵器片1点、明治以降に降ると思われる陶磁器、ガラス器片が5点ある。

## ＜引用・参考文献＞

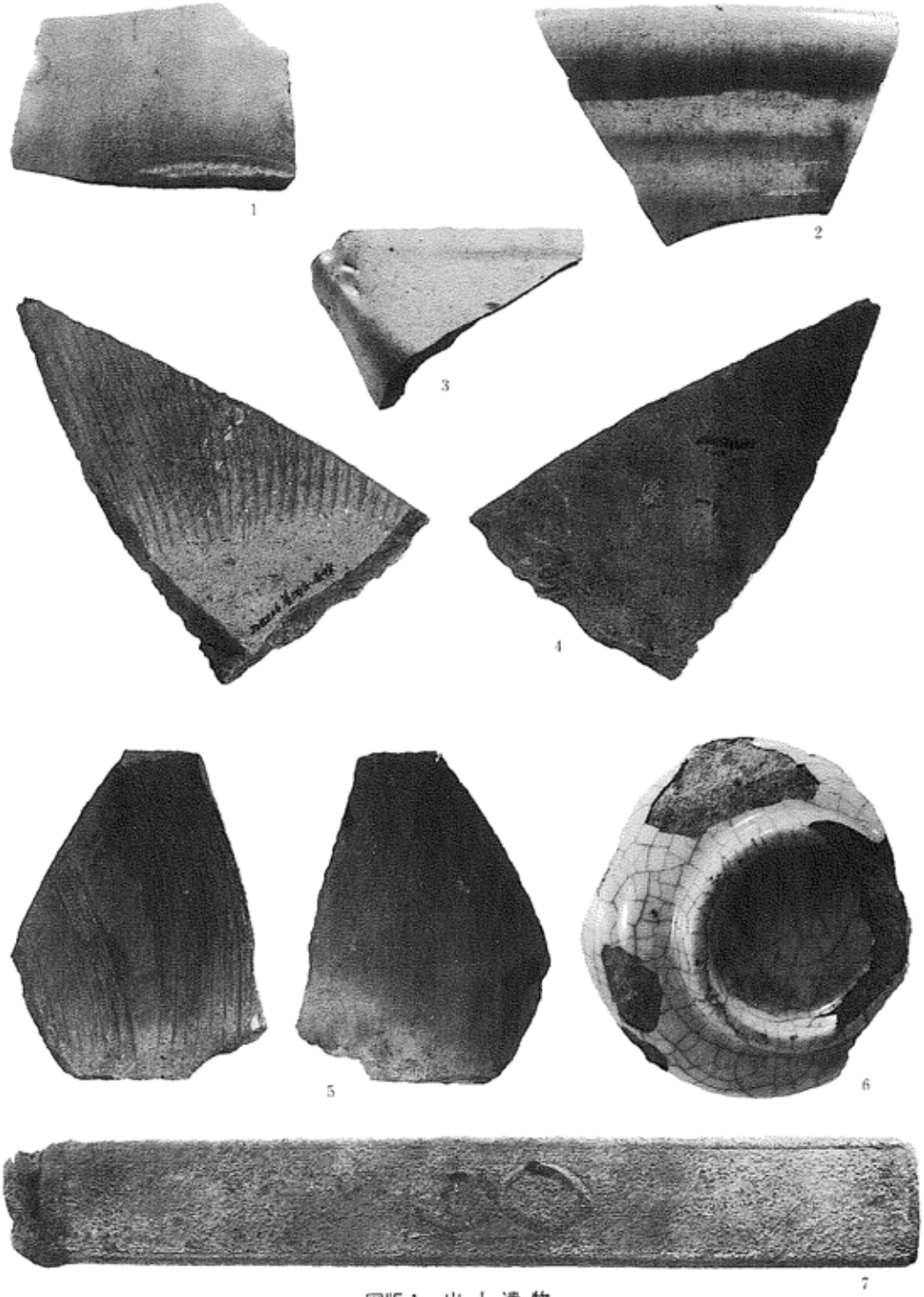
佐藤　巧（1981）『ダム下に沈む七ヶ宿街道集落の調査記録』七ヶ宿町教育委員会

七ヶ宿町（1978）『七ヶ宿町史』

芹沢長介他（1981）『日本のやきもの集成1．　北海道　東北　関東』



第2図　出土した縄文土器




図版1　出土遺物

# (4) 大熊南遺跡

# 調　査　要　項

遺跡記号：ＪＡ（遺跡地名表登載番号 02342）

遺跡所在地：宮城県白石市小原大熊字南

調査期間：昭和 59 年 11 月 12 目～11 月 17 日

調査主体者：宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：平沢英二郎、後藤彰信

調査対象面積：6000 ㎡

発掘面積：2500 ㎡

# Ⅰ．遺 跡 の 立 地

大熊南遺跡は白石市小原大熊字南にあり、白石川をはさんで国道 113 号線の北側に位置する。遺跡は、白石川左岸の河岸段丘上に立地しており、南端は段丘崖で白石川が東流している。白石川の現河床との比高は約 10mである。遺跡の北西部には丘陵がせまっており、遺跡は北西から南東にむかって緩やかに傾斜している。

なお、遺跡周辺の歴史的環境については「小梁川遺跡」を参照されたい。

# Ⅱ．調査の方法と経過

国道 113 号付替工事に伴う記録保存のための調査である。第 1 次調査は昭和 59 年 6 月に実施した。№.468～469 の部分を除いた宅地・果樹園と畑地を対象にセンター杭を基準とし、傾斜方向に巾 3mの 4 本の平行トレンチを設定し表土剥離を行った。

第 2 次調査は、専売契約されたタバコの収穫後の 11 月に残った地区を対象に実施した。タバコ畑の表土剥離を行った。2 回の調査の結果、耕作などの削平のため遺構の検出はできなかったが表土層から若干の縄文土器と石器を得た。遺跡の中心は路線外にある可能性が考えられる。

# Ⅲ. 調 査 の 成 果

**1．土器**　第 1 図 1～7、いずれも深鉢形土器である。

第 1 図 1：口縁部破片である。口縁部に沿う沈線文が施されている。

第 1 図 2：胴部破片である。半截竹管による横位平行沈線文が描かれている。

第 1 図 3～4：胴部破片である。羽状縄文が施されている。4 は、0 段多条縄文が用いられている。胎土には繊維が含まれている。

第 1 図 5：波状口縁を呈し、波頂部には縦位貼付文が加えられている。地文に、ループ縄文が施されている。胎土には繊維が含まれている。

第 1 図 6～7：胴部破片である。羽状縄文が構成されている。

以上、胎土・文様の特徴から第 1 図 1～2 は、縄文時代早期中葉、第 1 図 3～5 は縄文時代前期前葉、第 1 図 6～7 は縄文晩期に比定されるものと思われるが、いずれも小破片のために型式名までは明らかではない。

**2．石器**　石鏃 2 点を含む石器 32 点が出土している。石材は頁岩が主で一部玉髄質の石材も含まれる。

第１図８：石錐である。厚手の剥片を素材に急角度の剥離が施される。

第１図９：石鏃である。基部の一端が破損している。

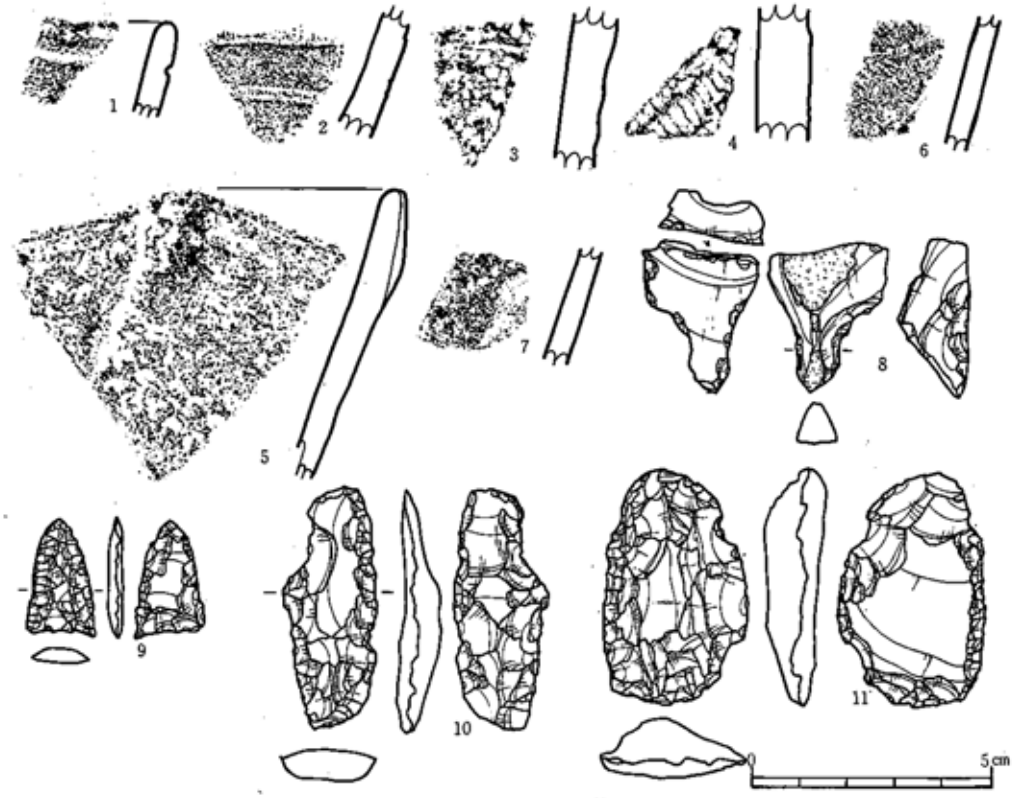
第１図10：不定形石器である。両面加工で側縁で鋸歯状を呈する。

第１図11：箆状石器？である。剥片素材で裏面（図の右側）にも二次加工があるが、右側縁の加工は表面の剥離のための事前の調整のようにみえる。図示した外に、9 と同様の基部形態だが、側縁が直線になる石鏃、それから、不定形石器、二次加工ある剥片、剥片がある（写真図版 2）。資料の所属時期は石鏃・箆状石器が縄文時代早、前期と考えられるが、他は不明である。

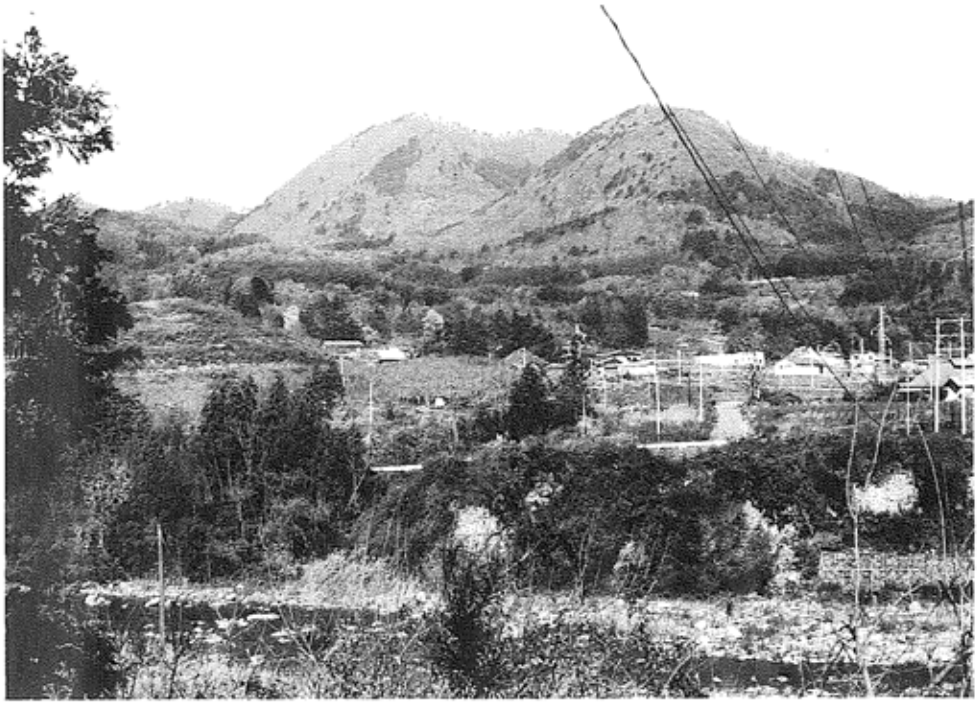
## Ⅳ. ま　と　め

1.　遺跡は白石川左岸の河岸段丘上に立地している。遺構は検出されていない。

2.　土器は縄文早期、前期、晩期に属するものが出土している。石器は石鏃、石錐等 32 点出土している。




第１図　出　土　遺　物



図版1 遺 跡 遠 景

図版2 出 土 遺 物